二國七高僧傳圖會

本朝之卷

五

三國七高僧傳圖會本朝之巻末

元暦元年二月七日。摂州一の谷れ合戦ふ。本三位中將重衡卿源家の為ま虜られ。九郎判官義經の下知ふよつて。嚴しく武士ふ預られゆふ。ふ後中將重衡の卿ハ。義經の許へ出家せばやと思ふハ。免しゆひてんやと宣ひれば。義經が計ひ。ハ叶ひ難し。御所へ申ゆて其御左右ふ依べしと。奏聞あれし所ふ。頼朝ふ仰合せ。て出家の暇と免んと。治ゆ。たの由仰下されゆとハ。御氣色かくして力及ばゆ。中將重ねて出家ハ御免なられ。今ハ申に及ばず。さゝ年来相知て侍る上人と請て。後世の事とも尋聞ゆと有れば。上人ハ誰ぞ。御座ぞと問奉る。黒谷の法然房と申されゆる。兼て貴き上人と聞給ひ。後世の情みと思ひつゝ是と免し奉る。三位中將斜ならぬ悦びて。侍臣友時と使して。黒谷の庵室へ申されし。法然上人來ゆひて對面して。

九曜文庫

中將たくく言つく。重衡の身の身ゐて侍るし時ハ。栄花ゐ誇て驕楽憍々の心
ありしかも。當来の昇沈かつ見ること侍らぬ。運盡世みぐるゝて後ハ。此ゐて
軍役ゐて戰ひ。人と失ひ身と助んと勵ん。悪念ハ無間ゐ遠つく一分の善心
曾て起らぬ。就中南都炎上の事。ハ仕へ世ゐ隨ふ習ゐて。王命と申
父命と申し。衆徒の悪行と鎮ん爲ゐまゐ向ふところに。側らぐさの伽藍の
滅亡ゐ及べると。力及ばざる次第なりと。大將軍と勤めし上ハ重衡が罪業
と罷成候ひぬん。其報ゐや多ち一門の中に。我或一個虜られ。京田舎ゐ恥と曝
とゐ附てと。一生の所業墓なく拙きこと今おひ合せり。罪業ハ須弥より
も高く。善業ハ微塵ばかりも畜へまべらぬ。備まし終まるば。火宅刀の
苦果曾て疑るし。出家の暇と申侍まども。責ての罪の深さゐ御免なれば。頂ゐ髪
剃と宛く出家ゐ准へ奉て。戒と授て候らハぬや。又斯る罪人の一業とも免る
べきと待らハ。句示しぬ。年来の見參。其詮今ゐ有と宣ひれば。上人哀て聞

給ひて。誠ゐ御一門の御栄花ハ官職と云ひ俸禄と申。傍若無人ゐ見え
おとゝぬせしが。今斯成ぬるハ盛者必衰の理。夢幻のごとくなりされば善ゐつき悪
ゐつき怨と起し。悦とるひ事有べし次。電光朝露の無益の所。なれも斯も
有めぐし。永世の苦ミさと恐てと恐あるべき事ゐて侍。受難き人界の
生なり。値ぐ如来の教なり。而るゐ今悪逆と犯して悪心と飜し。善根
なくして善心ゐ住して御座ハ三世の諸佛爭ゐ隨喜しぬ。さん先非と悔て
後世と恐る。是と懺悔滅罪の功德と名ぶく。抑浄土十方ゐ搆へ諸佛三世ゐ出
ぬぐと。罪悪不善の凡夫入事實ゐ。彌陀の本願念佛の一行でかうこそ貴侍れ
土と九品ゐ分て破戒闡提と嫌ふことなく。行と六字ゐつゞそ愚痴暗鈍も唱る
ゐ使あり。一念十念と正業とあり。十悪五逆と廻心とれば往生と見えたり。
念々称名當懺悔と宣て。念々毎ゐ佛名と称ぐれば無始の罪障とくく消
滅せしと。一聲称念罪皆除と擇して一聲弥陀と唱ふれば。過現の罪こゐ除る

重衡卿源空上人と請て戒を授る
本三位中將重衡卿ハ平相國清盛公の五男にして宗盛知盛等の舍弟なり元暦元年一の谷の合戰に生捕れ副將軍なりしが軍破れて虜となり都にのぼり折〻上人を請て淨土の法門を聽聞し戒を授る
重衡

生を願ひ給ふ甚あはれなり此時布施として松蔭の硯を上人に進ぜらる其硯今洛北百万遍知恩寺にあり
源空

故に南無阿弥陀佛と十遍唱へ一念の間に能八十億劫の生死の罪を滅す。憑てを憑むべしは五劫思惟の本願。念じても念じべきは此弥陀の名號なり行住座臥を嫌はねば四儀の称念に頼ひなく。時所諸縁を論ぜねば散乱の衆生に據あり。下品下生の五逆の人と稱して已に往生を遂ぐ。末代末世の重罪に輩も唱へば必ず来迎に預るべし。是を他力の本願と名く。又頼教一乗の教こそ浄土の法門弥陀願巧肝要斯のごとし。善知識せれば其後上人斜りをとり三位中将の頂に三度あてたまふ。初は三帰戒を授け。後は十重禁を説き御布施と覚しくて口に金蒔なる双紙箱一合差置給へり。此箱は中将の秘藏したまひしなりと。侍のもとに預置たまひしなりるが都落の時に取忘れ給ひたりと思い出しまいて。友時をもって召寄たまひしなり。偖て三位中将は今の知識の授戒の縁と以て。必来世の解脱を助けたまへと宣ひて敢て泣々ばし上人は衣の袖に雙紙箱を包何と言ふ詞もなくて涙に咽て出給ふと云々

源平盛衰記大意

元暦元年三月十日本三位中将重衡卿は兵衛佐源頼朝申請に依て梶原平三景時相具して関東に下向あり。同廿六日鎌倉に入廿七日兵衛佐殿重衡卿に対面あり。今後翌年又京都へ帰され。南都の衆徒の願に任せ山城國木津の邊の艸堂に於て誅せられぬ。六月三日今に是を哀堂と号けり。衆徒等首を申請て法華寺の鳥居前に於て竿に貫き。高く捧げて是をさらし次。去る治承の合戦に南都を亡し伽藍を焼失あり。怨を報じ処なりと云一説に重衡卿源空上人への布施として松蔭硯と鏡一面とを進ぜる。此鏡と結縁の為として俊乗房重源の方へ送つかれしを。大佛を鑄奉る爐の中へ入らるるに飛出て竟に溶化ざりし。故に大佛殿正面の柱に打付なりとぞ。是を又松永の兵火に罹て焼失せしとぞ言傳ふ

文治元年八月廿八日盧舎那佛の大像成就し。元の如くに磨きあらし奉り。開眼供養あるべし。後白河法皇南都に御幸なり。源平盛衰記に見えたり。

元暦元年三月十五日。権亮三位中將平維盛。讃岐國屋嶋の館と忍び出。與三兵衛尉重景。石童丸と云童。船に心得たる武里と云る舎人。此三人を具し。紀伊國由良の湊に渡り。是より陸に上り。粉川寺に參詣し。折ふし此間より源空上人此地に下り給ひて。念門法門の談議あり。維盛かくと聞ぬ。與三兵衛重景を招き。態とも都に上り源空上人に逢奉る。後世のことを尋聞べ。ひとをあれども。道狹き身なれば力かし。上人たまく此寺に在ぬこう幸なれ。悼まれども。見參し奉るべく思えり如何あるべきとのたまへば。重景畏つて何の慎こう候べき。上人と生死の佛と承る。然べき善知識にこそ。後世菩提の御爲に御聽聞あるべし。折ふし縱災害にあるとても痛思召べからず。闘諍合戦の場あるとて身を失いて修羅の悪所に生候なるべし。此は聞法隨喜の窓にして命を亡す事あるに弥陀の淨利に往生せんと思召べし。賢く申れば然るべしと夜に入て重景を御使にして。源空上人へ申されるは。維盛高野參詣の志し

有く屋嶋の館を忍び出。これ迫罷り侍る。折ふし上人此所に在ると聞て出離の法門一句兼なきを。仰遣されれば上人哀と思しめして。聽く維盛卿を請し入奉て見參らひて實に〳〵ありがたく思ひ奉られ。御身都を出ひて後。人を定かとて亡い給ふと兼ねふ付ては如何ちゝはゝと心苦く思奉し。再見參に入奉るべく。哀に悦入侍て。備とさしもの世の乱の中にはげく高野參詣の御志し。愛度と思召立給ふ事うれしく泣たまへ。維盛の子ひりは家門の栄華をぞふ必に極めて。先帝とぞ一族悉く西海に落下り給へ。人々〳〵に憧れ出侍ぬ。憂こも多く中に難波潟一の谷にて卿上雲客屢亡びぬ。適討のとさく者も世に有空は侍らど。夜は終夜今や水の底に沈ひと歎き。昼は終日今は歌に失くと悲ひこも角も静心ちしられば遂に通るまじき者也に。貴き結戒の地と兼まへ。高野に參り出家とげ。其後いかにも成べきと思ひて侍て。屋嶋を出て是まで来て。不圖見え奉るこそうれし

りんして其夜は菴室に留まり法口説く物語りするに、曉ぐるに維盛少くらう身と成さず日毎に讀誦しめ御經あり。水の底にも沈まん時は同く沈奉んと事罪ふかく覺え候。若世に出でて身と聞なさん時は、おろし出して后世弔い給へと宣ひてうちと進ぜらるる。源空上人請ひて、たゝい之なくして爭ふ志奉るぞきうれども。斯思召入く業もいは。披見ん折々は必弔い奉るべしとて。拜見しめへば四半の小双紙に金泥にて書小字の法華經なり。最哀れと思しり。維盛卿は今日こぶまりて名殘をと惜こく侍まで。維盛と平家の嫡々として頼朝にこそ相尋めべしと披露あり。世の人口と憚まい。戒を持暇申さばやと宣へば。上人は此間説く戒のほどを聽聞あるまいと存ぜれども御急ぎと兼ねは戒を授け奉るべしとて。圓頓無作の大戒梵網の十重禁を説き。上人結て曰。塔中の釈迦は此法を説きて佛位十界の衆生に授臺上の舍那は此戒をもつて正覺を華藏世界に唱ふ。法華一實の妙戒は

能持の一言に戒珠を胸の間に研き。合掌の十指に十界を實際に安んじ衆生正覺の直道即身成佛の要路なり。是則ち薄地底下の凡夫の一毫の善も記者罪悪生死の衆生の出離の期も此輩。修行覺道に入ぬる速に佛果を成ずる計。此戒に如ずして之に仍て梵網經には。一切有心者皆應摂佛戒。衆生受佛戒即入諸佛位。位同大覺位。真是諸佛子。一度受此戒者。入諸佛位同大覺位と説給へば誠に難有功德なり戒師の戒を授るは授戒灌頂とて。佛前の智水を後佛に授る意なれば此戒を受るは即身に正覺を唱るなり故に此戒を得ては。永く不失の戒にて。一度うけて後永く失ふことなしこそ宣ひけれ。維盛も聽衆ことに隨喜の涙を流しけり。其後念佛の法門弥陀の本願なれば説給へ。さ程に教化せしかば維盛は善知識にあひ奉るとなれば法々立出なるが契あれば後生には必ず參會と宣ひく。夫くに高野に參詣の上人も良に思ひ遥に見送り奉り袖をぬらしなまへば。見る人袂を絞りけり。

維盛は小松内大臣重盛の子息なり

壽永元暦の間源平の乱ふ[illegible]く命を都鄙ふ失[illegible]ふ其數を[illegible]ば茲ふ
俊乗房重源無縁の慈悲とられく後世の苦を救[illegible]なりふ興福寺東
大寺[illegible]始めて道俗の貴賤を勧め一七日の大念佛を修[illegible]ふ其頃[illegible]ハ
世人いまだ念佛のいみじきを知[illegible]て勧ふ叶[illegible]ばこの[illegible]俊乗房此事
を歎きて人の信を勧んが為ふ大佛殿のつぎ半作[illegible]る廡間ふ唐より渡
奉る浄土の曼陀羅[illegible]びふ五祖の真影をうけて供粮し奉らん為源空上人
を南都へ招請して導師[illegible]と上人領掌し
五祖の真影[illegible]て浄土の法門を述る師多[illegible]ど源空
上人唐宋二代の高僧傳の中[illegible]曇鸞道綽善導懐感少庸の五師を
抜撰く一宗の相兼を立[illegible]ふ後俊乗房重源入唐の時源空仰られく
曰く唐ふ五祖の影像あり必ず是を得く帰朝あるべ[illegible]と[illegible]て重源渡
唐して後普く尋[illegible]ふ上人の仰ふ遠[illegible]び果而五祖一幅ふ画る影像を

得たり。重源ふく上人の鑑く遠[illegible]を[illegible]る彼大和國當麻寺の曼陀羅
弥陀如来化尼[illegible]て大炊帝の御宇天平宝字七年ふ織[illegible]る
霊像[illegible]り。序正三方の縁の[illegible]ひ。日観三障の雲の光景。人さ[illegible]る辨[illegible]
しふ甚後文徳帝の御宇天安二年ふ唐土[illegible]渡[illegible]る善導大師の御
釈の観経の疏の文を見て始く人不審を[illegible]し天平宝字七年[illegible]天安
二年ふ至[illegible]て甚[illegible]ば九十六年[illegible]り。往昔和朝ふ織[illegible]る曼陀羅の
遥の後ふ渡[illegible]る観経の疏の文ふ合[illegible]ハ不思議[illegible]て言傳[illegible]ふ今上人先
[illegible]く浄土の宗義をひ[illegible]ひ。後ふ重源入唐のとき彼影像を渡[illegible]
と命じ[illegible]れ得て飯[illegible]ふ[illegible]の影像上人の仰ふ遠[illegible]ると豈奇特[illegible]
[illegible]れハ道俗貴賤[illegible]の五祖の真影を拝[illegible]く上人の德ふ帰[illegible]倍念佛増長
しぬ。當時嵯峨二尊院經藏ふ安置[illegible]ハ彼重源将来の真影[illegible]
源空上人既ふ御約束の日ふ[illegible]ば上人御弟子十四人を召具[illegible]て入御あ[illegible]

上人の恩召ふ御道世の御姿ゑて御供類あるべきなりと門下一統ふ評義
あるて申ゝゝは其義有べしと本朝無双の大伽藍なり。道世隠居の事ハ各別
の義なり是ハ大法會諸佛菩薩の御影向の場なり。爭ふ不法不義ゑて御
られん事。人々の嘲ゝ有べしゝて法會の具足と上人(送)奉る。上人力なく當寺
でかりとばゝぞ仰せる。時所の衆議として從僧大童子中童子力者人ゝふ至る
まで皆々南都の經営なり。庭前ふ幢ゝして。佛檀華扎天蓋寶散玉珠の華
鬘高座禮盤錫杖香爐香筥。念數。散華。華籠。新調義麗なり。招請の
僧三十口山仕の躰ハ羅漢ふ云とし導師の躰ハ瑛珞。細軟の法服ふ九條の香
の袈裟威儀釋尊のごとし。寅の一天の乱聲辰の刻集會。耳目と驚ゝ。幡
蓋風ふ翻し自在天の粧ひとうつし。沈香砌ふ薫じて海紫岸の匂ひふ類し
持金剛僧の振舞ハ。法界官の侍從ふ似なり。珠幡七寶とゝろゝ。寶螺六端
とあゝゝ凡堂内の飾ゝ供具の躰。言語道断なり。饒鉢虚空ふ響きて

貴賤移ゝと覺えゝ。梵唄雲を穿ゝく伽陀妙ときゝゝ。大阿闍梨の法義ハ
實ふ智處城の教主と疑ゝれ。三昧発願の音聲ハ舍衛の金言とあやは
なる。當ふ今此曼陀羅と解説ゝふ。惣して四分あゝ。ふハ勸發大衆用心
分。二ふハ縁起因縁生信分三ふハ正説曼陀羅法門分四ふハ廻向法界往生分ゝ。
是ゝ始ゝて弥陀観音願主の深ゝ信心と鑑ゝ。浄土の変相の曼陀ら
と織あゝゝふ人多く生信と賜ゝゝ。正説曼陀羅法門分とゝふハ。右の縁ハ
観經の序分義卷の第二。一代の法門を始ゝて厭離穢土欣求浄土の旨禁父
禁母の往生歴々ゝ。右の縁ハ観經正宗分卷の第三ふあゝる三昧正受の義
ふ趣き若男若女の観門明ゝゝ。下の縁ハ正宗分上中下品の来迎華臺
究然ゝゝと顕ゝゝ中臺と仰けハ四十八願。莊嚴浄土の義式弥陀の舌迹
なり。惣して三方の縁ハ釋迦撥遣の恩德肝ふ銘ゝ。弥陀如来願力所成の莊
嚴観音勢至諸菩薩九品蓮臺清浄大海衆。嚴重殊勝なり。九定善十

三觀ハ觀毎ふ念佛ふ敢し散善九品ハ品毎ふ往生とぐき旨五箇日の間ぎ
御讃嘆あるうれハ聽聞の徒耳と驚し。肝ふ銘じ涙おとぐ〻ぐ故ふ。偏執の
族と邪見と捨て元生ふいろう忽ふ三祇の功德と滿し。正ふ五智の果位ふ
登る。然れハ。三賢十地の大士四禪六欲の天衆ふ悉く侍衛と。生前ハ
所願も滿足する心地ろう。凡貴賤袖をちぐう衆徒袂を潤ちと。慢心爭いと
失ひ。伽藍と實ふ動きぬうと。身の毛弥よそぐ賢くろう。扨次の日ろう同五
祖の眞影と供養せ〻ろ。凡三國傳来の血脉釋尊付屬の相承おの〻本宗と
閑き。深く淨土の真門ふ結成せる旨と述ろう。惣じて前後七日の間御説法の
音聲解脱の躰大師の舊儀とうはし。富樓那と學びぬふ。偏執の諸宗も捨
劣の義と忘と。法相至極の習学者と。我慢の旗鉾とそぐて。上代も中頃
うの碩德大智不思議の法門き及ぐる由と褒美して退散〻と。
介後難波奈良の伶人。舞樂の祕事ときぬふ新羅高麗の曲と尽ぐ。上下

れと折角と見物と扨上人御飯浴あるぐき由の御出立あろ茲ふ俊乗房
重源まろて言されりハ偖も此大佛と造し奉る同御堂建立斯の如し凡日本
一の大善根と存じ候ふ。此間の御説法ふ遂ふ御意ふ掛られぐ候ふ。ちわぬの功
德とろと御讃嘆候りぐ御供糧ハ各別のとろて進ぐも。當伽藍と称揚
候ぐさと存じ候へ。余所外の事とても候ハど。何さぬの御意とて候へん
定ろて経論所釋の文等候てんと言と。上人仰られるハ此大善根ハ日出
度殊勝ふぐ思ひろども御辺のたろふハ斯ぐ修福造営ハ大苦悩とて見
ろられ日本のとふぬび唐土までの勸進ハ苦悩ふ。此功德念佛二三反
ろハ考ろぐと見えろと。ろ〻此事ぐて風聞あろて興福寺ふ聞えし。両
門路の衆徒會合して偖ろと此法然房。此間の法門等ハ類ひろき学匠
大智者と聞れど。是ハ心ふ大偏執と持たるとて。即時ふ大鐘と鳴し
衆會して僉議まちろ。一僧進と出言ろハ。當伽藍ハ是聖武天皇の御

衆徒
源空の
興と停て
大佛造営
の功德を
論ど
源空

定範
覺範

願。行基菩薩文殊の化身として建立しつゝ然れば婆羅門僧正ハ。南浮第一と供養しまつり。斯ゆへに大伽藍と。念佛二三遍の功力ハ者しらしめ。されば偏執のいとゝ深ふあるべし。速ふ恥辱をあらためて追下ひさ者とも也。時ハ追々與力同心の惡僧七百余人雲霞のごとく集まりて。茲ふ覺範僧都の曰く當寺ハこれ法相唯識のところ大乘習學のみぎん也。徑ひ經釋明文あるとてこれを其憚なく。斯の如き過言ふ及ぶべきか。是佛意ふと神慮ふ遠ふべき者なり。こゝ押寄て追拂ふべきさまの也と云。此中ふと定範僧都といふこれ言ハるゝ面々の僉議ありとつゝむと。如此の經論所釈の證文歷然たるハ爭ふ種々の沙汰ふ及ぶべきか。夫ハ學匠義ふあるべ。法然房も定りて證據あらん先子細と相尋ねて其返答ふ云べき者なやこれふ依く。者若しこれ大略学匠達なるあらば。定範の義ふ同して尤もなるべし。若不思議の文證あらんにハ無道の強議なるべし。学匠の所存ふあらんと一同して源空上人の宿房へ寄たりしれば

上人ハこれふ御發駕と聞えしかば衆徒ハ急ふ道さと。般若寺の前ふて追ひさ。定範法然の乘りたるしゝ輿のまくふほくと立寄。輿の轅とひしと握りて動きず。當伽藍造立の功德ハ念佛二三返ふ者なり。私の語ふこれの經文ふあやとこそ。其時源空の御弟子等ハ心中ふ驚き。今度南都への入御ハ如何候べきと申しかと。入御あらて斯のごとくの珍事ふあるふ口惜きまして各色と憂び。七百余人の衆徒其外偏執のともがら。次手をうかゝあれ法門ふつまり聊しても謬あるべ。恥辱とあるべんと。腕をさすりつゝ見えしかり上人ふしかと憚てたまへば定範が言とてそのふ。華厳經を引く見たまへと答へたまふ。定範もさる者あて華厳經ハ廣本なり。いまの巻いまの品ふ侍るべと。工人佛地品を引て見るべと仰せらるゝ。工人の御下てと押つゝく華厳經をとるふ遣しかる時をうつゝ經をとりもちて。定範經をもきりれば工人其經をとりたまへ文ハ鍵のごとく各ハ左右ふ見附たまへるとて。御手ふとりもちて。佛地品を

巻ふ也。是見たまへと仰られバ。老僧四五人立ちて。見ればべ十丈金色像六万五千躰。十度造供糧不如称弥陀と見えつ上人宣ふ。又妙塔勝心経と取ちらへ引て見せ奉ん。南无阿弥陀佛一念功徳勝於一百三十五恒河沙成満金塔者と云ふ此余経釋論勝て計ふべ。當伽藍ハ一佛一精舎一度造立の供糧ふ。此等の経文の如くハ莫大の金像供養ふべ。念佛二三返の功徳ふ者ふ。源空ガ私の會釋ふ。明文の如くハ只一返の功徳ふ者ふ。とゝ経を勘へられ。實ふも斯ふ大乗経等の文を破して言ふバ力をくとゞ仰せふ。定範ふ佛ふ平等ふ十力四无畏丹證外用の功徳皆ふ等し。何ふて弥陀と念ずふ功徳。諸佛の善根ふ勝ふ也ふ。上人宣まく弥陀因位の執行別ふ成佛別ふ。故ふ三世の諸佛ふ超過せりと云ふ。其日の辰の上刻ふ終日の問答ふ上人の御返答條々勝れり。且浄土の法門弥陀の名号諸教ふ讃ふ。三世の諸佛の功徳善根ふ秀

肝心ふ也と仰せられバ。各学西ふて皆々帰伏し奉ふ

此條一書ハ建久二年のころと云明義抄ふ正治二年四月ふ載ふ正治二年ハ大佛供糧の五ヶ年後ふ。ふられバ文治二年の誤ふ乎。九大原問答と同年ふて彼宗論の以前ふ

文治四年の春の頃。明遍僧都ふ夢想と御覧ずふ。有ふ人ハ摂州荒陵山四天王寺ふ詣ふて西門ふ眠きて見ふ。非人乞丐其外病者ふ許多卧ふ。看病人と又多くふて。或ハ飯ふ粟柳梨ふを病者ふ与ふふ少ふ受ふ者とあふとハ。病者多くハ手とかくふ。茲ふ看病人の中ふ實ふ慈悲ふ深げふ僧ふて。米飯とふて病者ふ進ふて通ふ。皆此米飯と受ふ飯と見たまへ。夢心地ふ力づけふ病者と。大功ふ成ふ。倩ふ思ふ。栗柳梨と与へふ。大事ふ病者ハ一口ふ喰ふと見ふ。斯ふ堅牢菓物ハ華厳天台等の法門ふて。今此大事ふ病者ハ。極悪最下の衆生ふ。されば法ハ難行ふ。衆生の機分ハ劣ふ。機法あひ相叶ふぬ故。然ふ慈悲深げふ僧。看病の為ふ米飯と与へ通られふ。元氣有ふ病者も。

養ひ勞ち〜大切の病者こし皆々受く飲ち見ゆる弥陀の本願ちり。慈悲深き僧ハ善知識ちり南無阿弥陀佛の名号ハぐんの米飲ちぐ〜。機法相應して生死を離るべき瑞相と。六方恒沙の諸佛のてして見せ〜あり。ふと思ひ合せて。此由と源空上人へ委しく書く進せ。是ぞ〜ふ上人の御勸化の殊勝なるぞ故うと。益々伏し信心深ちり〜ちぞ。最尊ちり〜

同五年の春のころ。源空御弟子ふ十余人百具〜て。蓮臺野舟岳山西傍敬ふ御出有て言ふ。源空両三年以前ふ夢ちちあり。夢の實否とちぐさ事ちりぞ。ふし高き塚の上ふのぼりめひ四面と見ゆ。ふし有りふ髑髏と彼是と取あつえさて塚ふ築行道して阿弥陀經數返ちるく吊いたまへ

皮ふとそ男女のちふとあまと。骨ふへうちる人形ちとれ〜

詠じ〜ひて暫く首とちぐちふ百四五十もあちる其中ふ大ちる髑髏ちり血の涙を流し〜ち。御弟子ふおちちそ。余の不思議さ。これ如何ちる人の髑髏そ

候ちんと申ちふ。源空をいそちちぐさ。先ちぐと火葬せちそ件の髑髏と燒し奉る名号と書して土婦ちひ御弟子等ふ語ちり。源空ちり〜叡山ふ有し時同学の僧ふ三位註記祐尊ちり者ちり。然ちふ或時京師ふ趣きしが二三日彼処ふあちそ。一夜失ちり〜ちも其往去と知らぬ次の年人の風聞〜ちる人ふ殺害せ〜れ亡骸ハ蓮臺野ふ捨ちんと聞く。是と一族ちもハ知らぬ〜空〜く犬野子ふ荒され果ちり。源空ちが夢ふ見ちそ曰く。我過去の宿習ふちて人ふ殺害せ〜ちて空〜く野外の土ちちり。日頃の同学の好吊ちひちり〜ち候ち首ハ野原ふ存ちり。天台の習学ふ有ちぐ。候ちて涙を流して告ちり。吾と夢ちちふ涙をちぐ〜。必ぐ吊ひ奉ちぐ〜。心易くおもひちへと答へ〜ぶ。數ちちぬゆちさちその後も尚涙を流せり。されハ亡〜く彼祐尊が首をちんと言ひちる工人其夜の夢ふ祐尊来ちく。御ちちひふあちり忽ちふ天工ちちと見ゆ〜。殊勝ちり〜御ちちひちそ

同年修明門院より女院へ源空上人と召され七箇日の間御説戒あり。南岳大師天台ふ傳つたへ戒品をも又慈覚大師五臺山ふ入りて文殊の即身ふ値奉て御相傳あり三種の淨戒。叡空より傳受戒あり。此三種淨戒とは一ふ有情遠益戒。二ふ勝善法戒三ふ勝律義戒なり。此三種の戒ふ十二の戒躰あり。一得永不失の大乘戒なり此等の戒行七日御讃嘆あり。第五日ふあるる朝いまゝ御説戒始らるゝふ香爐ふ火をもて両三日消えぬ。このけむりふあるるとき男七人女五人都合十二人臨終まで異香薫じて失ずとなり。女院上人の御目ふ十四五ばかりなる天童香爐ふ火を置く。修明院の御前ふて勢至菩薩大乘戒七日御讃嘆の結縁ふ。梅檀を焚く忉利天へ登ると言て天をあをいで登ると見るふ余の人々の目ふ雀飛昇ると見るふとなり。又説戒結願のとき萩垣の元より兎とび出る。垣の上ふ昇て高く飛あがりて落る石あるなり頭とうちて死ぬと。此兎の口より襲申ひらる童子。天をちらして昇て

あるなり。又畜生なれども不惜身命の志深くして忽ちふ畜業を免れるを不思義なりし事どもなり。唐土ふ隋唐二代の國士大極殿ふて仁王般若を講じ給ふ。今ハ法然上人清涼殿ふて御説戒あり。同女院ふ袈裟を授奉あるふ。唐の安然和尚ハ戒品ハ傳へ給ひしを袈裟ハ授けられず。古今ふ双なき大德なれば。弥和尚上人の位なり。尊きことを言もをろかなり。

完ふ河内國の住人天野四郎と云ふ悪黨の張本あり。此者人の有德なると聞て夜討をなして財宝を奪い山賊をなし海賊を働らきなる。人異名して耳四郎と名づく。一時徒弟信空の宿所姉小路白河二階の房へ源空上人を招請申されなる。其折節耳四郎都ふ上りて在々所々と窺い歩るなり。便りなきふ二階の坊へ潜び入て。椽の下ふ蟄まりて人静らハ財宝を掠んと。時の移るを待居たり上人常の御事なれい出離の要道婆婆の有為無常。轉寛の所を常住と思い入る無墓さよ。極楽無為の不退の快樂を期をぐれと弥陀本願の念

佛ふちくべくなる道理と説きなゞく人衆ふ生ぜしむ。悪人とうう程なく三悪道ふかへりて。无量永劫苦しゝと受んこと悲しかるべしやと。懲ふ夜三更ふ及ぶまで御法談あり。天野掾の下ふありて具ふ聴聞せ程ふ何ことを打てん。嗚呼我既いかるゝ心ぞや。拙きものの我う外ふもあし。抑四方の人々ハ皆貴きも賤きも。必後世と願ふたるふ。我ハうづふ此身と類んで。種々無量の罪とつくるこれ浅ましきことと思ひ悔て嘆くしぶ。夜と既ふ明ぬるしぶ。掾の下う徐々と這出つ。上人の御前ふ平伏し我身の所業の悪をとゞ。此房の掾の下ふ昨夜うう忍入く窺ふ折ふ上人の御法門と業を先非と悔ゝ年来の罪業と歎きて罷出候と。涙とゞ〳〵懺悔しこれバ上人打うづきぬひ。實ふ神妙ふ思切う。縱ひ日来悪業と犯したりとも。今日うして徧ふ念佛せバ悪人摂取の本願これバ何ふ捨たまふべき必ず決定往生すべしと。種々ふ御法門と説させ〳〵これバ夫う四郎ハ无極の道世者うして少の罪とも犯さじ。愛度うし道心

ちう。然るふ年来日頃うゝと含む敵ども多ううれども。四郎が発心ちうゝ聞て討も搦めもせずして有りう。四郎ハ昔ふ引くく腰刀ばふ指を有れば人ゝふ兼ての遺恨と捨て許しう。時ふ丹波國の住人篠村新左衛門範長と者あて此ろ京師ふ滞留して在りう三ゝ前ふ頼ゝ一族と彼天野が為ふ討ちうふ何ゝも此本意とゝげゝと思込う故たゝ四郎道心者ちうして許とゞくあゞして謀畧ちうく四郎と我家ふ賺し招き。只管ふ酒と勧む。天野ハ上戸ちうゝ勧りふ隨い數杯と傾け。終ふ酔卧して前後とゝど。人静ゝ後範長刀とめいもて宵ふ着せる衣引のけ紬と刀と指ゝうふ。熟酔ゝ四郎が息の音とき〳〵念佛の声ちう惟しくおりひ紙燭とり之と見るべ阿弥陀如来の御姿と幻のごくふて。不思議ふおりて聲とゝつて驚して能々これバ二〳〵ハ元の四郎ちう時ふ範長刀と投ゝとあ〳〵難有や斯う悪人ちう堅固の同心と起セバかくのごゝき尊き身ちうちう。我爭うゝと殺ゝんと忽発心してたゞひ古への

敵の意を懺悔して同道心者となる頻て髻をきり四郎八法名を教西とかう。
範長は善教とかう。是偏に上人の御法門の奇特なり
一書云河内國天野四郎として強盗の張本なる者あり人をころし寶を掠を
業として世を渡るが年長く後上人の教につきて出家して教阿弥陀佛
と名づけ中略相模國川村となる地に下りて住る後大往生をとげしとなり
建久元年二月上旬に源空上人宣旨をうけ院参して折ふし仙洞後白河法皇の御所
に高僧五六人参りたる一人は無動寺の僧正寛圓一人は仁和寺の僧正淨范一人
石山の上人專祐一人は横川の僧正眞範一人は大乘院の僧正祐範なり。法皇これ
僧侶と御覧ありて宣ひけるは今日法然上人と初めて方々参内して神妙に侍れ
と聖道淨土の法門出離の肝要を詳ぜしめ朕なりとび聞し召るべしと堀川
殿兼つぐ仰せられ尚基と御勅實に僥倖と存じ候に尤叡慮に相叶ひたまへ
へ候と仰られ于時無動寺の僧正申しけるは何事の肝要なる申侍べき。去る文治の頃

顕眞の催促によりて隨分の碩德達大原立禪寺において宗論の問答に大略念
佛往生決定と落居候に諸宗の對判いまだ不審に存候と云々。
大乘院の僧正言ありけるは召あるべしと今日同心に御参内称るべし御参
會さるべしと覺候に君の御勅のごとく尤聖道淨土の法詳申兼るべきなりと
云々石山の僧正實に大原にその問答のありしの法門本朝にいまも候べし。
なれども君の御前にて定詳す佛教多門なれども般佛は又一佛なり。无動寺
横河の歸法は天台なり。大乘院の歸法は又法相なり。仁和寺の般法は華嚴
なり愚僧又眞言なり法然上人は天台法相華嚴三論眞言九宗の兼學
至極の法なりと捨て無相傳の念佛と見るべし。日ごろ稽古の修学なり。
往生極楽の一法と思ひつき偏に称名念佛候なり八宗九宗は無縁なりて
念佛の一法は有縁なり抑愚老今日本朝無双と披露ある法然上人に値奉。
不審一白申べく。上人の御意と殊に蒙るべく候。一印一真言證道詣路と

院中ニ於テ諸宗の碩徳難易二道の法門を談ず

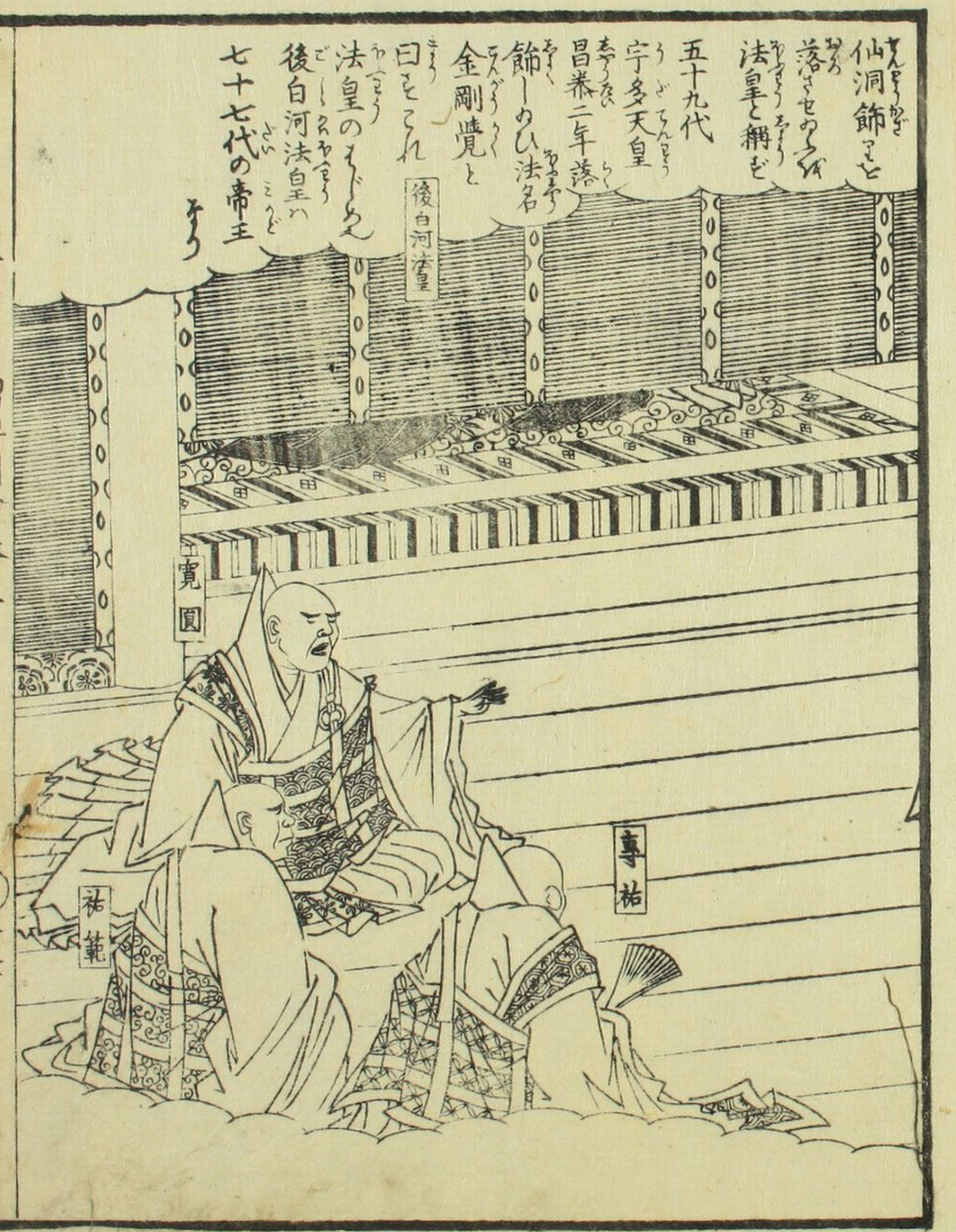
天子仕と道れゆくと仙洞とハ其言と奉ラく文と認ると院宣とハ行啓と御幸ハ或ハ太上天皇上皇仙院と稱ず御所と院の仙洞御所も申奉る

仙洞飾と落させの法皇と稱ず

五十九代
宇多天皇
昌泰二年落飾しゆひ法名金剛覺と曰をこれ

後白河法皇

法皇のそもそも後白河法皇ハ七十七代の帝王



いう。然るに唵の一字を胸に持てハ即身の如来なり。此息を鼻へ出せハ両部の大日虚空に現じ唵の一字を舌の先に かゝれハ諸尊空中に満ち。これ経に唵字三密即此法身遍照毘盧遮那得大悦持門とゝ。道理を御覧語ふ。念佛をぐるぐると唱へ侍ん。最不審に侍ん。心底のさハ兼ゝ侍ん。上人答て曰く。源空を御前の問答さゝひに罷存じ侍ん。その趣ハ君ハ無上法皇の御名をかゝせ給ふ。其御前にて聖道浄土の真偽を決ゝんと傍に潜に説ふ。考べきなり。當座にて難易の二道を治定ゝ。秘密神呪経に云く。一言語皆是弥陀。所説思量讃嘆両字。秘密蔵経に云。三世諸佛。出世本懐阿弥陀佛。名号爲説。大師の御釋に云く。真言行者於南无阿弥陀佛名号更勿作淺略思。若入真言門。諸言語皆是。真言何況阿弥陀と。又云く。念佛者十。甘露真言。一代聖教。結経八万。法蔵妙肝心出離生死最要法。弥陀来迎得往生。ゝ。名号とゝ。真言あるべ

らず。又真言ゝ名号ゝ。天台の座主に補せらるゝ。固く道と判じ。眞言門にて修行ゝ難行いう。如何ゝ鈍根無智極悪最下の徒ハ眞言止觀の修行に かゝるべき。尤空しかるべし。各不審ゝ。終に浄土易行に結成せり。

同年の春三月七日顕眞法印ゝ辞退ゝ。勅使大原に宣命ゝ。座主職に授けられ終に召出されに所謂末代の高僧本山の賢哲ゝ。同五月廿四日に最勝講の證義に勤め同廿八日權僧正に任ゝ。山を治めゝ三ヶ年のあいだ内論義二度寂光大師の御廟の番論義。傳教大師の御廟の浄土院の番論義ゝ。執行れ吉山の佛法の絶ゝとゝ。廢れゝと起されゝ。傍に尚称名の行ゝ。法華堂の初夜の行法に高聲念佛千返と加へ修行せり。其行

今は退轉なし。時に日来の腫物の病著まさるに發て浄土院の番論義の夜。建久三年十月十四日寅の刻に東塔圓融房にして正念違ずして念佛相續して往生の望を遂ぐ。遺言の旨あるて則ち大原に送て奉る。叡山の名僧くと〻ぐし源空上人の教ふるを以て往生の道を思い定められき。心あん人誰か其跡を希ざんや。茲に諸宗の碩学卒して源空に飯せばいかゝ。一天四海併て念佛を唱ふ。号して源空普く智恵第一の名を得ぬ。

建久三年霊山寺に詣て三七日不断念佛のあらば燈明に光明あらて四面赫々たり。五日の夜に行道に勢至菩薩うち交て同列に給ふ。或人夢のごとくに見れば持て源空に此〻と告しかば然るべき侍ん。返答あるべしとたん是をもて始て人々奇異のおもひをなす。此三七日不断念佛の時衆は都に十二人なり。法蓮房。正観房。定蓮房。藏人入道住蓮房。安樂坊。蓮光坊。西仙房。清浄房。念佛房。蓮乗房。阿證房。其先達は源空上人〻右十二人

三番に守つて勤行せる。三七日に〻の時。異香室の中に満く。音楽耳に聞ふ。聽聞の人々四十八の燈を見る。三七日の亡の時阿弥陀如来出現しぬ。爾時源空上人の口より光を放ちぬ。これを見る人々住蓮房。安樂房。西仙房。法蓮房。清浄房等なり。唐の善導和尚は口より化佛を現し。此上人は口より光明を出して示代念佛の祖師誰か敢くこれを背ん哉。首楞嚴經の勢至章に云く。我本因地に於て念佛の心を以て無生忍に入る。今此界に於て念佛の人を攝して浄土に帰せしむと云々。此文思い合せ給へと云々

此時源空上人五十四歳なり。

一時後白河の法皇源空上人を宮中に請して。往生要集を講ぜしむ。藤原隆信に勅して。上人の眞像を寫さしめ給。蓮華王院の宝庫に藏めたまふ。蓋し殊の外なる御敬ひなり。蓮華王院は洛東大佛の傍にあり俗に三十三間堂と云

建久三年法皇玉體不豫にあらせ御悩なり。門葉の人々。行舜僧正。法眼

圓毫法印祐賢等御祈禱のたゝんふ。眞讀の大般若五檀の供糧ちんど有〜
〜と其驗ことゝも給るど日ふ隨ひて御惱重らせもふ。ちうぢ源空上人とゝもれ
出離の大事ハ偏ふたのゝ思召るゝ〜仰あるれば。上人謹ぐ〜言上られるハ。十善
の御戒行ハ過去ハ今生ふ極て。今生の持戒勤行ハ未來の翻肉とゝる。御栄花
北闕の御たのゝハ今生ふ極てゝ万事の座下これ病床ふ極ると見ゝるを
給るゝ。往生極楽の素懷ちんの疑ひあ〜せもぐゝ。婆婆の御たの〜ゝハ夢
幻のごとし〜極楽ハ無量无邊の法樂なり九重の有為の都。淨土ハ无為法性の
臺なり。念佛往生の御信心ふハ无數の奮業と消滅て。一念ふ眞如の都ふ
とぐ位るゝ。君ゝれて即身ふ往生ハとげゝるもゝ〜候つどと。恩德報謝の
ためふ御念佛ゝゝるもの〜ふぐゝと。言上ゝるもひ〜なまひ〜ゝバ法皇御座ゝ
たゝ〜もゝい西ふ向いて。合掌と御胸ふあゝく。念佛數返ふて。蓮臺結仰ふ
素懷と遂さもゝ。御崩筭六十一ゝと言〜ゝる

建久四年九月靈山平松の御房ふおひて。後白河の法皇御一周忌のためふ七日の御
別行あり。結番衆二十三人ゝ。第五夜の寅の刻ふ源空上人たゞ一個行道〜
〜ゝもゝ嵐とけ〜吹来て正面の障子と吹なゝ〜両燈とゝ消〜。闇
夜ふ燈ゝゝふ道場ふ光明ありて白昼のゞ〜慈圓僧正不思議ふ覺て。
道場のゝゝと見ゞゝし給ゝハ人々の色ゝゝ金色ゝゝ偖上人と見まゝ〜ゝもバ
御後ふ金色の圓光立おほひ右の傍ふ生身の大勢至立添ゝ上人行道〜
なゝ〜ハ板の上一尺ばかり高く空と蹈給ゝ。御足の下ふハ八葉の青蓮華とを
ゝ。念佛の御声ふ隨ひて御口ゝ光明出。慈圓僧正月輪殿上人と稱〜
なゝひて涙とゝ〜五体と地ふ投〜禮〜奉ゝ〜秋義の三位入道觀佛聲と
あげ涙とゝ〜歸命稽首大勢至菩薩三身薩埵法然上人生々世々値遇
頂戴と唱もハ。二十三人の結衆と同音ふ斯の〜〜月輪殿言〜ゝ〜。上人
幷ものゝ名ゝ。右の御脇ふ生ゝ勢至立ゝひて行道〜ゝ〜ゝる

奇異の御事ども侍らんと申給い給ひ上人宣〜観音はおろかなりや。月輪殿おろかなりと答へたまへ。上人仰せらるは三信具足の念佛者とは中尊の阿弥陀佛と説たまへり。観音勢至は供奉なりとは思へども。然るに経には无量壽佛化身無數與観世音大勢至常来至此行人之所と説給へり。又若念佛者當知此人是人中芬陀利華。観世音菩薩大勢至菩薩爲其勝友當坐道場生佛家と説へり。されば観音の立添給へる事大に不審なりとて仰せらるる。生身の薩埵凡夫の肉眼をもて禮〜奉らんと敢て奇特に侍らんと。上人三昧發得の嚴重なること尊き言ども〜と言あへり

九條関白頼實公後法性寺殿と号す　かねて源空上人に御帰依淺からざりしが後に御出家まします

洛西月輪の別莊に住せる故月輪の禪閤と称し法名圓證或は圓照と号す云明義抄に寿永元年御出家とあり一云建久二年と云

建久六年南都東大寺大佛殿十一間二階金銅十六丈八尺の盧舎那佛成就ありて三月

十二日供養と遂らる。鎌倉の右大將頼朝卿結縁の爲に上洛あり。都鄙の道俗貴賤の老若群参して最嚴なる大法會なり大勧進俊乗房重源は凡人にあらず〜當寺の願文に見えたり。重源故に上の醍醐の僧徒にて真言の學匠なりしが。源空上人の高德に歸して往生を願ひ。師資の厚くせんなり。尤上人の指圖に仍て大勧進職に補せらる。既に全く成就せんと其効又類ひなし。其始造營を企るに番匠の器量を選んが爲に立等をとりて曰。我家を作らんと思へり。桶の下を掘と打んとあり。如何あるべきと問まるる。番匠かしこまると振て。雨有家作るは見あらび申さずと答ふ。重源これ思へらく只造るべしとあらんにこそ。ユハさるに兼引を有まじと仕出べし。傍輩に笑まんと。甚無益為業なりと申す。詩多の番匠みな此のごとく答へる。されども其中に一人兼引ありて。重源に我望む如き屋を汝これまで造りなれと。此の答てやすく造候へとを侍らんと。何まれ望ませ給へ。造りて試みんと申されば其に応ず

實ふ[illegible]如く作らんとふいあるべ。唯心の程と知んが為ふ言はるくそ。則ちこれを棟梁の大工として東大寺とぞ造立せしもとるん。大工万ふ計業かとぞ人なるられば。其頃の諺ふ支度第一の俊乗房とぞ言あるる。源空上人大原ふおいて問答の折々と相具せしもて一人なる。上人の勸めふまかせて。念佛を信仰の余り醍醐にて無常臨時の念佛を勸めて末代の恒規とし。其外七ヶ所ふ不斷念佛を興隆せしもて東大寺の念佛堂。高野山の新別所ふその中なる。往昔重源若年の折々。天狗ふ[illegible]して或深山ふ在せしが天狗の首領とおぼしきが[illegible]是ハ行とぞふ大なる利益とおぼしんがるる人なる。速ふ許さべしと。天狗の輩と制しなる程ふ。ゆるされて故郷ふ[illegible]れしとぞ。それ詞違らば。大業と立られるぞ不思議なる。建久六年六月六日。東大寺ふて寂せしもとるん

一説ふハ建久二年六月六日寂寿十六又云建保六年六月六日（操ふ前の建久ハ建保の誤あやまるべし）

因云此時大佛と鑄入用　唐金七十三万九千五百六十斤。黄金一万四百三十六両

水銀五百八千六百二十両　白鑞一万二千六百八十斤　金箔十五万枚

炭一万六千六百五十六石　治士　宋陳和桂。草部是助。

佛工　康慶。運慶。定覺。快慶。番匠。物部為里。櫻嶋國宗。

建久六年三月十二日大佛供養　右大將源頼朝卿錄令君より上洛

後鳥羽院行幸　導師権僧正覺憲。咒願師権僧正勝賢

征夷大將軍頼朝卿上洛の時。武藏國の住人津戸三郎為守生年三十三供奉して上る。此為守ハ生年十八歳のとき治承四年八月。頼朝石橋山の合戦ふ。武藏の國より馳参じて味方ふ加る。余後安房の國（越ふ[illegible]）も同く相從て所々の合戦ふ忠勤と尽し。名とあげぬと言ふ。建久六年三月上洛して大佛供養ふて後同廿日源空上人菴室ふ参して合戦度々の罪と懺悔し念佛往生の道と兼て[illegible]ふ称名の行者とるるもれば。本國上下とも怠らるるふ。或人熊谷入道津戸三郎ふ。無智の者ふく餘行ふ難ければ

て念佛げうと勸めゝる。有智の人は必ずしも念佛のみは限らず。ひく申
るゝと為守つゝ聞く事の次ふ上人ふ此由を尋申ゝれば上人のゝ曰く。是は
極さく僻ごとゝる。其故は念佛の行は原来有智無智ふ限らず。弥陀の昔誓ひ
ゆへ一本願を普く一切衆生の為なり。無智の為ふは念佛と願ず。有智の為は
餘の深く行と願じめゝたまふ。十方衆生の白ふ博く有智無智有罪無罪
善人悪人持戒破戒かゝを愚るも乃至みふ籠もるゝ。されば往生の道と
問尋候人は有智无智と論ずと各念佛の行ぞうと教申たまう。然るふ
虚言搆へく余様ふ念佛と申止んとする者は前生ふ念佛三昧浄土の法門を
聞ず後世ふ又三悪道に堕るべき者の事と思て申ふて候ふなり。其由聖教
見て曰く見有修行。起瞋毒方便。破壊競生忍。如此生盲闡提輩。毀滅
頓教永沈淪。起過大地微塵劫。未可得離三途苦と申たるなり。此文の意は
浄土とねがひ念佛と行とる者と見ては怒と起し毒心と含て計策とめぐし

種々の方便とるて念佛の行と破る。爭ひて恨とる。是と止めんともとるなり。
斯のごとき人は生ぜざるなり。以来佛法の眼つぶれ佛の因を失る闡提の徒なり。弥陀
の名号を称へく永き生死と免るふ切と常住の極楽ふ往生とるふ頓教の
御法とゝるし。其罪ふよりて三悪道ふ沈み大地微塵劫と過るとも永く三悪
道の身と離るべきとは言るなり。余れかゝる虚言とたゝて申候へん人をば。
却く憐びまるる左程の者の申ふて念佛ふ疑とる。不信と起さん
者は言ふ足らず。則ち弥陀ふ縁らく。往生ふ時いまだ者は聞さる信等
行とゝ見ては腹たゝて怒とく妨んとすと多し。能々心得ていうふ
人の申ふも心を綾ふべきず。強ち信ぜざるは佛とるとも力及ばず
況や凡夫の力ふおよぶべきかゝ。不信の衆生と利益せんとおもふ事つけても
疾極楽ふ参りて證とすと知きて生死ふ入り誹謗不信の者とも変して
一切の衆生と利益せんとおもふべき事ふて侍ふ也。念佛と言さゝるゝんふは

心を常ふりく口ふとなれす唱へべし。徒ひ身をも穢すく口をも穢すくこゝろを清くして言べし。つゝうん時たりとも忘れずして隙なく申べきへ往生の業ふ必むるべし。あゝめ行又ハ吳る悟りの人ふ對ひて。つゝく強く仰せるべきず。異解吳学の人と見てハ是を敬ひ。輕しめ謗ることなれ阿弥陀佛ふ縁うく極樂淨土ふ契ることゝかん人の信ずるどゝ願ふくもうんふハ力及ずず。只心ふまかせていろる行をも後生と助て三悪道と離ることと人の心ふ隨ひて勸ろ候ふべきなり。塵ばかりとも叶べき人ふハ阿弥陀佛をもめ極樂を使ふべきなり。つゝふ言をもて此世の人念佛ふあるべでい極樂ふ生れて生死を離るゝ事あるべしとこゝ此御返支と給ふて後いとく念佛の外他事なきると。見うしなて專修念佛の行人彼國ふ三十餘人まで出来あるれバ此由と上人へ申入るふ御返事ふ云ゝ。專修念佛の人ハ世ふ有がゝ候ふ一國ふ三十余人まで候ふらんを。誠實ふ天暗ふ候らんと。

建久八年の春源空上人月輪殿ふ。四帖の疏の御談義あるべ。一人

入御あるる此時熊谷の入道蓮生房御供ふ推参と。上人これを留めと思召ひしかども。漏ハさるをもとれなれバ留めなせハ却て悪うるんとも御ふ前近ハ参らじと思召ども何とも仰ずるるに。月輪殿まで供奉し奉て皆脫イ候ふて緣ふ手とうけ寄うを居たるる。既ふ上人御前ふおひて。御法談始うるが御法門の声程遠くして分明ふ聞えぎるべ。蓮生のいとくあるれ此世程口おしきに處ハあらじ。極樂ふハ斯る差別ハ有まじそのと。御座所が遠くして談義の御聲の聞えぎるとと。腹立しく高聲ふ申るを。月輪殿聞しめ是ハ何者ぞと御尋ありなれバ源空の仰ずるに。漏ハ武藏國の住人熊谷次郎直實と申武士ふて候ふが右大將殿と恨ふて出家し。伊豆國ふ走り湯山ふ参籠して候ひしが。上洛仕て源空ふ弟子ふなりて如何さゝ推参ふて供をして候ふと聞え候ふを仰なれば月輪殿優しきさうふ。何ふとなるべきを唯めもして御使を出されて召れるふ。熊谷ハ一言辭退ふも及ずず召ふ隨ひ。

近く大床に伺候して聽聞仕り。往生の極樂は當來の果報なると遠し。今多く堂上にあつまれ。今生の果報を感じめると本願の念佛と行ぶべ。爭ぞ此或に及ぶべきと耳目を驚うして見えける

熊谷次郎直實。姓は平氏武藏國の人也。父を直貞と号し。桓武天皇の遠裔直方が後にして直貞少きより雄氣あり。其住居する邑武藏國に猛き熊あり。多く人を害ず。直貞弓を引き熊を射る。熊矢を負ながら直貞に飛かかる。直貞刀をぬきて終に是を斬る。一族及び村民大に驚き且喜ぶ。於く其地を熊谷とよび。又熊谷を以て家号とし。直實も父に劣らず大剛勇の武士なり。平治の乱に源の義平に屬して郁芳門を守る十六騎の隨一なり。後に賴朝に屬し常陸國佐竹の役に高名あり。又摂州一の谷の戰ひに。平山の武者所季重と先登を爭て軍功少うして。且敦盛を討て後遁世して出家得道し蓮生と号く。京都新黑谷に至つて源空上人を師として

或日直實武州久下權守直光（直實の姨夫也）と境目を爭いて。之を訴へ直實を訴る所に不審あり。賴朝之を讁問に。直實弥を荅る詞を失ふ。而て大言して曰く。梶原景時に黨して以の如き下問に預る。たゝし明らかに辨證を以て勝眉を開くべしと。乃ち文書を卷て庭中に投入。座を立て脇指を拔て髮を切て走る。賴朝人をして之を追しめども遂得ず遁世いと云。僧となりて信心堅固にして。專修念佛し他事をまじへず。嘗て粟生野光明寺に建立して寓居して後。從弟幸阿弥陀佛坊に向て故郷に下る。行住坐卧に西方を後にせず。京都より東に下るに鞍を逆まにして。しかも向て馬に乘行しと云云

源平盛衰記に云く。修理大夫經盛の末子無官大夫敦盛は紺の錦の直衣に萌黃匂の鎧に白星の冑を著し。滋藤の弓に十八指なる護田の鳥の尾の矢鏃毛の馬に乘なして只一騎。新中納言の乘給へる舟を志して。一町ばかり游ぎ出て

一の谷の戦場ゟ
直實敦盛を
討圖

平家物語ゟ
大夫敦盛卿ハ
修理大夫經盛卿
の三男にて十七
歳の兒姿ゟ落足
して沖ゟ船ゟ目と
け馬と海へゟ入
五六段ばかり游がせ
られゟ跡ゟ熊谷

直實

敦盛

直實追付扇と上
て招きられハ取てゟ返
打際ゟ組て討ゟ給ぬ
首と包まんとて鎧の直垂
と解くられの錦の嚢ゟ
入られる笛をゟ腰ゟされ
たるなるゟ此暁一の谷の
城中ゟて管絃ゟひつゟハ此人
みてゟるゟのとて大將軍
の見参ゟ入られるとも
直實られゟ世とゟの
心發て終ゟ源空上人の
弟子ゟゟ出家ゟく
蓮生と号を

浮ぬ沈ぬ漂ひゐ武藏國の住人熊谷次郎直實ハ。哀れと敵ハ組でやと。渚ハ立て東西と伺ひ居たる所ハ是と見附。馬と海ハざぶと打入れ。大將軍ことと見奉れ。正こと海ハ入らもの哉。返〳〵久やく。斯まことハ日本第一の剛の者熊谷次郎直實と言りれハ。敦盛何こるおもれん馬の鼻と引〳〵。渚へ向けて泳でもたる馬の足立程ハたりれば弓矢とハ投てて。太刀と抜額ハあて。喚て上りたまひりると。熊谷待うけて上りもたてど。水鞠ことと蹴〳〵。馬と馬と馳すべく取組。浪打際ハざぶと落ち。上ハ下ハ。二度三度ハころびころんども。大夫ハ幼若ちり熊谷ハ古つものちりれば。遂ハ上ハ成左右の膝と以て。甲の袖とひどと押ばれば。大夫ハ〳〵と働たりとば。熊谷腰の刀と抜出〳〵。既ハ首と掻んとて。丹曹と見れば。十五六ばかりの若上鶻。薄化粧ハかは黑ちり。微笑とこひて見えたり。熊谷ハある無慙や弓失とる身ハ何やんこれやと若〳〵ちり上鶻ハ。ちりと刀と立

ばばと心弱くぞ思ひる抑誰の御子ぞと問れハ只〳〵慙ども宣ひる。切奉つて雜人の中ハ棄ん進ん。便〳〵侍と。浮ハも知ぬ東國の夷下鶻ハあて。名乘まじと思召ぬ。それも所理ハてぐまと存ぜる旨あり〳〵申ちと。大夫思れるハ。名のりずとも名乘ずとも道ぐ非ぞ。但存ぬ。勲功の賞と申さん為ハあり。組も切らと先世の契。離ばと思て報ぜる也。ざぶ名乘んとおもひつ。存ぜる旨の有ちば聞ちぞ是ハ故大政入道殿の第ハ修理大夫經盛と以人の末の子ぞ。ま左无官れば無官の大夫敦盛。生年十六ハる也と宣ひり。熊谷涙と〳〵と流〳〵ち。あハ心憂の御事や。備ハ小次郎と同年ぞ實ハ左程ぞ御座ん。岩木とこれぬ心も子の悲ハ類ひ〳〵。況や是ちちる〳〵嚴さ人と失い奉て。父母の悶これ〳〵ん事の哀さよ中ハを小次郎と同年ハ給ちる最惜き。助け奉らぞや。又御心も猛き人を

座しけり日本第一の剛の者と名乗りて落武者の身として此年の若きに返しあはせ給ひしも大将軍と見えたり。是は公軍なりあら惜や。助けばやと思ひしかどて透け押て寄どりに前にも後にも組で落思ひて分捕しける間に熊谷こそ一の谷にて現に組たりし敵を逃して人に取れたりと言れんと子孫にいたりて弓矢の名を折べしと思ひかへして申けるは何とぞ助け進らせんやと存じ侍れども源氏陸に充満たり迚も遁させ給はじ御身にあらじ御菩提を直実よく訪ひ奉るべし。草の陰にて御覧せよ。疎略あるべき候はずとて目を塞歯をくひ合せて涙ながら其首を掻落ぬ。無慙といふも愚なり。敦盛のと恐れども心を降さず。幼齢の人とて頓る凡庸の類ひには非ざりけり平家の人々は今討れ給ふ迄も情を捨させ給はで此殿軍の陣にてぞ隙には吹んと思しけるにこそ色ある漢竹の笛を香しむらさきの錦の袋に入れて鎧の引合せに指たり。熊谷之を見たてまつり最惜や此程も城中に此暁も物の音聞えけるは此人にて御座しけり源氏の軍兵は東國より數万騎上りたれども笛ふくもの一人もなし。如何なれば平家の公達は斯るに優しは御座しましけんと涙ながらに見ぬ。彼笛をもって其後に父經盛笛の上手にておはしましけるが砂金百両来朝にまつられて得し漢竹を一技なりけるを。殊によき両節の間を一與より天台座主前の明雲僧正に仰せ付けて。秘密瑜伽壇に立て七日加持し。秘蔵して彫きざし笛なり子息達の中には敦盛器量の仁なり。七歳の時より傳へて持ちたり。夜更るまでに吹たれば小枝と名附られたり。熊谷は笛と頸とを手に捧げ。子息小次郎が許に来りて是を見よ修理大夫が御子に無官大夫敦盛とて生年十六と名乗給ひつるを助け奉らばやと思ひつれども汝等が弓矢の末を顧て斬られ目と見る悲しさよ縦ひ直実世にある者とならぬとも究賢後世を弔ひ奉れと言合め。夫よりして熊谷は弥發心の思ひ出来けり。後は軍わさざりける 中畧 熊谷

治部直實ハ敦盛の頸とハ取りまでと。嬉しとハ忘れて。只悲しのみと
流し甲の袖と濡しける。倩これなりけるを。業づる不愚なる禽獸まだにと子と
思ふ道ハ志深し。冬の中ふ身を亡し矢先ふかるるに命を失ふにも子と思ふ
情ふあり。人倫にそなる憐まざらん子失ふる身にて何やん子孫の後と思いけ
他人の命を奪ふん蜻蛉の有るるの身をもるる何思ふべき世の末と。是
程ふ若くうるくに上萬と失ひ歎たるうん父母の心の中こそ最階しれ
なひ勲功の賞ふハ預らべきと。此首遺物返し送て。今一度かれる貌をも。
見奉らんと思ひんバ實撿ふと合セ懸首ふとさるれども大將軍ふ申
請しく馬鞍甲冑弓矢漢竹の笛一も取落さん。一紙の消息狀ふ相具して。
敦盛の首とバ父修理大夫つぞ送るる　進狀返事ふ曰
直實ハ此返事とぬいて。最き涙と流しけく爲方うるぞおもいける。穢土の習
と悲して道れんと思ひるる西國の軍鎮るく。黒谷の法然房ふ參るく

髻と切蓮生と名とつけて。終ふ世と背きるるとこそ
建久八年の初冬ふ月揄殿源空上人の御巷室ふ御入あるて。常ふも御心靜
ふ御物語あり愚老一期の間ハ明鏡ふ對ふ心持して上人ふ値參らセ邪念城
翻へ。雜行自力と捨て承てるるく信と傾け儀ふ。志しるる一期の後子
孫ふと傳へ又末代の学者の手本。證據ふとて候ふるる肝要の治定
もる聖教と少しと方便權門ふく。御制作儀ひて給て儀ふく當代末代乃
鑽と存じくく候へと仰られバ上人聞召ま。其旨考へ見參ふ入べきとて。假名
書の文と上下二卷撰まれ。月輪殿へ參らせるる。るるく拜見しひ心肝ふ
深て殊勝ふ思召。志るふ假名書ふてハ余て目安くて。却て煩々く疑ひ儀ん
も無念ふ候ふ志るべくへ。真名ふ撰びてと有しバ同九年正月ふ清書
あるて一本月輪殿へ進ぜられる。之と題して選擇集と号を
一書云建久八年源空上人いるる惱ふてあるる。月輪どの深く御ふげさ

あらくる程ふ。幾ばくもなくして平愈しぬひぬる。上人同九年正月一日より草庵ふ
閉籠りて。余所ふ出ずたまはざりければ。藤左衛門重經御使として。浄土
の法門年来示しと承るとぞ。心ふかくおもひ給へ。要文を記して給へ。且へ
對面ふ擬らへ。其ふ後の御形見ふもなるべき侍らんと仰られければ安樂房
と執筆として。撰擇集を選ばせられけるふ。第三の章書寫のとき。我り筆
作の器ふあらずと。此の聖き座ふ参ぜざらまでと申くると。上人聞たまひて此僧
自慢の心深くして悪道ふ落ちんとて是を退けられてけり。其後ハ真觀房
感西ふて書せしめとる。此書を選び進ぜしまて後。同年五月一日。上人の夢
の中ふ善導和尚来現して。汝専修念佛を弘通する故ふ殊更ふ来れる
ぞと示しぬふ。此書佛の御心ふかなることを知るべし。ふく信仰すふ
べきなり

源空上人月輪殿へ参ずるとふ。兼實公御ぐしを下向せ給ふ。卿相雲客

と下を騒ぎあへり。勿論なりとて程ふ上人此礼の慇懃なるべきなり思かひて。
月輪殿へ参ずるべきなんと為ふ房籠りて余所へ請れども趣き給ふ。何方へ
出たまへるとなり。兼實公ふ御嘆き有く緩ひ房籠なりとも。身ふ煩ひなるべ
きなりふ来りもるべき仰られば其後ハ常ふ御煩ひとて号せられけれ
ども數々請じたまへり。終ふハ辞退申所なくして参ずるとぞ。弟子正行
房心中ふ。あるべき房籠りて余所へ出たまへるずして。月輪殿へのみ参ずるふ
と擅那と謗りて。人の謗りとあるべしと。思ひて寢る夢
ふ上人の仰せられけるハ。汝ハ月輪へ行くと。謗りて仰せられけるとぞ
さる事侍りとも申せば。左ハあらず月論と我ら前生ふ因縁あり。餘人ふ
擬へべからず。宿因あるとあらばして謗るべきなり
と仰せられと見て覚て後上人ふ此と語られ。備ハ前生ふ因縁あるべきなり
宣ひける。御帰依他ふ異なるとし誠ふたなき支ふ非ずと覚えるとぞ

建久九年の夏園城寺の碩徳大僧正公胤。近来源空上人製作し給ふ選擇集と一覧あるべく。大ふ偏執して彼書と破もんが為ふ。一巻の文を作て浄土決疑抄と著す。此書ふ云く法華ふ即往安樂の文あり。観經ふ讀誦大乘の句あり。法華讀誦の者拯樂ふ生ぜんと疑ひす。唯念佛と附属する是大なる誤なり。源空上人是を御覧じ給ひて云く此難甚だ非なり。先難破はその宗義を立て後難破ぜん。然るふ今浄土の宗義ふ暗くして。僻難をいたさば誰か破られざらん。夫浄土宗の心は。観經前後の説。大乘經とりて皆悉く往生の内ふ摂入せり。其中ふ何ぞ法華ひとり漏んや。観經ふ普く摂入する意は。念佛ふ對して癖もんが為なりと。公胤これを傳聞て。聞て物と云ず。一時順徳院の御嫡姪の間公胤は加持の為ふ召さる。源空は御往生の為ふ召る。同じく院参あるべき奉行屋参のおりは両上人と一所ふあるて數浄土の法門を談ぜられる。さる程ふ公胤本房ふ入て弟子等ふ向ひて云く。昨日の参内ふ二の德を得り。一ふは未だ聞ざる

浄土の宗義を聞。二ふは本知たる事の僻なると改ひ。寔ふ安堵して源空は安才なり。見たる如の浄土の宗義聖意ふ違べからず。偏ふ源空上人の義を信ずべし。謗る人あらば科なりとひて。我作る所の浄土決擬抄を焼手ぬ。公胤の不審ふは諸行を許さば。悪人も往生と況や諸行と。皆善なり何ぞ強ちふ婦人と。源空の答ふは一向専念無量壽佛と説り。觀經ふは繫念弥陀。所想於西方と説て又同き經ふ。念佛衆生摂取不捨と説き阿弥陀經ふは一心不乱と説き。善導の御釋ふは一向專称弥陀佛名と釋し給ふ。天親菩薩は世尊我一心と云ふ。是諸行と閑く文なり。諸行と交へば雜行自力なり。是と隨縁雜善恐難生と雜給ふと云々（様なる明義抄ふ此條建久七年と書あるべし。選擇集と清書あるべ建久九年正月なれば全く九年と七年と書あるべし）者なれば一書ふ云源空上人語て宣く。我一向專念の義を立ふ人多く謗て云く。諸行と修すとも全く念佛往生の障ふは成ぜず。何ぞ強ふ一向專念の義と立る。是偏執の義なりと云へり。斯のごく難と出ぬ。此宗の謂を知らざる

故なり。經ハ一向專念无量壽佛と云ひ釋ハ一向專念弥陀佛名と判ず。
經釋と放まて私ハ義と立ハ誠ハ責る所道ぶ〻し。此難と出さんとおもふ。先
釋尊を謗ず次ハ善導を謗るべし。其科まつ〻我身の上ハ悲ごと仰うん
ずる。一向專念の義と破る人多る中ハ。園城寺の長吏僧正公瀧ぞ大
僧都なりしと上人を誹謗して云く。公瀧が見たん文と。法然房の見ぬと
あるも。法然房の見る文と公瀧の見ぬもあるとと自讃して。淨土決疑抄
三卷と記して。選擇集を破し。則ち學佛房を使して。源空上人の菴ハ贈
る時上人彼使者ハひらいて。これを披き見るに。三卷の初ハ法華ハ即往安
樂の文あり。讀誦大乘の句あり。讀誦の業極樂ハ往生とるハ。何の妨あん
然るハ讀誦大乘の業を廢して。唯念佛ばかりと附屬ことハ是大なる誤
なりと。此文を見るに。さてさて宣く。此僧都これをどの人とハ思ハ
ざりし甚無下の事なり。一宗を立る時。これハ廢立の旨を存ぜんとなるべし。

然るハ法華をとゝ〻く觀經往生の行ハ入る〻事。宗義の廢立を忘るゝ
似なり。若し学道るべ觀經ハ亦前の教なり。彼中ハ法華を摂とるゝ
とぞ難ぜるべき。今の淨土宗の心ハ。觀經前後の諸大乘經を取く皆悉く
往生の行ハ中ハ摂とるなり。法華独ハ捨ん。著く摂とる意ハ。念佛ハ對て
是を廢せん為なりと宣ひられば。使帰く此由を語るハ。僧都口を閉て言ばなり
なり。一時宣秋門院中宮ハ。一品の宮御懐胎の時。源空上人ハ御戒の師ハ召され
公瀧僧都ハ。御導師ハ參るなりて。參會しまつて侍るに。御持戒なて源空
退出せんと者るハ。見參ハ入侍んと。公瀧僧都の使僧申ハを
まつ〻〻待るハ。御經供養なて。僧都来て源空ハ竭して云く。上人ハ
ハ念佛の事とぞ尋ね申べれども先大要るハつなて申侍るなり。東大寺
の戒の四分律ハて侍るとハいるる謂ハて侍ることハ有れば。東大寺の四分律ハ
て有べき道理と詳るハ擇しめ。僧都ハて考ハ見るハ。源空の申さく

熊谷西方ふ向ひて故郷ふ下る

熊谷蓮生房ハ信心堅固ふして專修念佛他事を雜へを嘗て粟生野光明寺を建て寓居して從弟の幸阿弥陀佛旁ふ謀りて故郷ふ下る平生行住座臥ふ西方を背ふせを京より関東ふ下るふ轍と逆ふして後ふ向て馬ふ乘てゆき

旨すまゝと遣さうれば次の日又參會の時昨日仰られ侍りしことも貫ぬ
さ候しいろゝて僧都以の外ふ源空へ皈敬しゝ浄土の法門と說し義て
余の事ども語られる中ふ玄惲と云ふ僧都申されれば其宗の人の
申侍しへうえうえて申侍しぶ暉と書てこゝ。くるとゝ讀ぶれ。惲と書
てうんとゝ訓侍まて源空直しうひる。惣じて斯の如きの誤ても七ヶ條
の僻事と直されたり常ふ見參せへ才覺ハつさ侍るん。玄ろ所の浄土の法門
聖意ふ違しぐうべ仰ざて信ぐべし彼上人の義と謗ること是大ろ科ろう
て則ち製作の決疑抄三卷と燒ましろう誠ふ博覽の至りぶ
誉申されるふ亂僧都ハ顯密の達者まて智行兼備の高僧なりふ
斯称義せられしこと信と取ふ足れる者ろと云て
正治二年の冬山門ふ桓舞僧都して学通ろう源空上人の菴室ふ參まて聖道
門の殊ふ勝れる道理と詳ふ述て浄土門の浅近の教ろる条至極ろう弥陀の本

願ハ權教權門ふて得道愚ろうるべし言られば源空ろしし是と敬しし
聞しふ頓て宜ふ諸宗の愛度と言語かしけゝ然ればと源空
等の如き愚痴ふるものハ難行難悟ぐ故ふ本願と賴と奉て弥陀の御力ふて
往生まべし佛ふ大經觀經の両經ふ弥陀の名号ハ無上功德と說き又
汝好持是語持是語者即是持無量壽佛名と弥勒阿難ふ付屬したまう天
台大師ハ難解難入且置不論即詣西方値佛開悟と示しぬる宗家又鈍根
无智難開語と釋しなまう菩薩ハ又難易の二道と分別せるる事あるるる
御辺の仰せる法門ハ源空習学せしと一昔ふ成る浄土の法門ハ習学せ
しして押へその簡ハ徒ぐるう此度の得道おやまるたまるる仰らる料簡ハ
法華三昧の所文ふまるる弥陀ぢる斯のごゝ比の法門と志しべば日のまゝの疑
と見さるべし浄土の法門聖道の修行ふ超過して往生やまると三世の諸佛も
說十方の佛も證誠しなまうと至極の法門と委しく說ぬしべ是も流石ふ

学庠ふて感涙と浮めて頭て多年の習学と閣浄土の法門とまるひて堅固の信心と起し終ふ三ヶ年の後奇特の往生と遂るとしそ

拙尾の明恵上人高辨ハ其項世ふ聞えし碩徳ふして盛ふ賢首宗と唱ふ時ふ源空上人の著しるふ選擇集と見て之と難し摧邪輪と云る書と三巻記して選擇集と破と源空の門徒挙つて摧邪輪ふ難と加へふ云ふて莊厳記と云る一巻の書とあらはして其難と救ふと云ふ義理相應せざるの間此書と作られて又名誉と落さんとて入道長房卿ハ原来明恵ふ帰したる人なれば彼摧邪輪と信じて高野の明遍僧都ふ見せ奉らんとしなんし時明遍ハ何の書ぞと云ふ選擇集と破したる書なりと申れば我ハ念佛者なり念佛と破したん書とハ手ふとるべからず目ふも見るべからずと云ふ彼入道長房卿と後ふハ選擇集の尊と事と聞ふて却て選擇集ふ帰して云ふの文ハ邪論なりと申れ

なりと其後又仁和寺の昇進房ハ邪論と持て明遍僧都ふ見せ奉るふ僧都の云ふ凡ふ破の道ハ先破もるるの義と心得て破もるるふ選擇集の趣きと心得もして破せられなるふ破さふ的なるる其中ふ異学異見と以て群賊ふたるると破せられたると是善導観経の疏の文なり全く法然房のごふ非ず大ふ生死と離れんと思ふ程の人の是まで罵詈誹謗せしと心得ると宜し彼明遍僧都ハ日本第一の誉ある大徳なり一時笠置の解脱上人澄憲法印明遍僧都會合して我寺一族三人ハ宗論し侍らんとまうさんふ澄憲法印筆と執て三論ふ明遍ふ敵の劔と害と法相ふ貞慶ふ解脱すと問ふすと云ふ宗論ふ叶べきと書れたる。すべて二期のあらそ論義ハ

はるかに申傳へる。斯ごとの高僧の尊ふ云ふ選擇集のあらそと推して知るべし。ふ明恵上人と菅宰相為長卿の許へおりしるを

摧邪論のことを申出したるれば。明惠の云く。さることを侍るべしと。僻言を
ひらかんと思ひうて。人の後悔し侍るべしと申されしかども
元久元年十月天台の座主華頂峯の雲朗僧正。学庠等を集め選擇集の
御沙汰あり。其中に聖道を捨て。淨土門に歸すべきことなどの以来一切の行集を
傍にもぐ紀音乃至隨他の前に暫く。定散の両門を開くべきこと。隨自の後に
かつて定散の門を閉じと文を始て聖道門をもて定散をも門雜行と候へ
せらるべ。捨閉閣傍の四の名目を座主勘ひて我祖師天台大師は四教五時を作
て大小權實を立なまへり。嘉祥は五教を判じ三乗眞實の旨とあり。惠果阿闍利
弘法大師は一代の佛教を顕教と密教と摂めり。各宗を立るに其
謂あり。法然房のごとき諸宗を滅亡し諸教を破とるべけんや。此学佛法の外
道守屋に有しるべき。早く天長と動し奉る。洛中をもしめ。永く无間の
地に移すべきものか。大德もものく同心せしめ否やとあるべきれば。おのく元の

御義と同じ奉るべし。早々明日大講堂の庭に會合すべし。定判に及ぶべしとて。
座主御房退散す。同十五日山門蜂起して。三千の衆徒會合して。議をなす
中にも西塔の法師に但馬の聖教浴秀進み出て言るは。佛法いかれば王法
佛法盛んの國に人法厚し。抑源空法師の佛法興帳のごとき。往昔本朝に佛法
を増し王法を厚くしるべ所に神威とぶべし。佛法失せば輩に似て既に太子種子を
断じ。是則ち佛法を重しるに故に。法敵をいたすべ。もしバ源空法師を
断罪せしめ諸宗佛法を興して王法繁昌の國たらん者をもとめ。又東塔南
谷の注記祐覚進んで云。夫惟れば吾山は七佛草創の地にして。三國傳法のもん
なり。桓武天皇の御宇に當山の中堂を立てしより已来。もしれて諸山にはだらく
藥師の威光を余佛に比して猶秀でたり。もしれば當山の法燈を湖上に同じ
山王御宣有るべしや。無才無了の輩の徒は法然房の智惠をたのみ。歸敬の首を
頓くれば。當山は是同せんや。日域に又佛法のべ急速に浴中をもしめ。弟子

等と遠國に配流せしむべきよしを、衆徒尤と同じ侍る。訴状をさげて奏覧を
経るに、君用ひまさんに神輿を陣頭にさげ、入洛して天裁を仰ぐべしと、衆議
頻て翌日訴状の草案して、同七日に藏人の註記清書をもちて、衆會の中に
て披露せむ。各これを聞て、神妙の義に同じ、中山大納言ぞの添状をもて
三千の衆徒一同の状進上せり。侯上これを天裁と蒙る。喜悦の眉ひらけの。
源空法師一人と三千の衆徒等と思ひ、くさや勅宣に急
速に天中に披露あるべし。本望にさぶらふ恐々謹言十一月日謹上中山大納言殿
と訴状をそへて不日遣しぬ。天中に披露あり。其勅宣に云く、泉門源空の
興隆佛法を信じて諸宗をおろそかに捨らるるに非ず。先皇貴尊の佛法を
よろこぶあまりに重て信ずる所なり。今山門の濫妨班足の憐に為して、三千の
聲憤文に隨ひて徳に叛せ、天象斯のごとし。抱門藤原朝臣隆房執
達如件。衆徒綸旨のごとくむなしく拝見して、ひとへに遺恨とぶ。神輿を下洛

のち披露ある。源空難義に思ひ依て山王の御寶前にて御起請
文其状に曰く、沙門源空敬白。山王七社護法善神。諸宗誹謗の事。諸教を
破謗し自宗獨成立するに非ず。唯廢權立實とするの。諸宗の常法なり。源空
の新義に非ず是に依て諸教滅盡の基なるべし。難易の二道に論文あり。
若餘々偽らば六方の諸佛の知見に洩れ殊に醫王善逝の御加護にあづかるべ。別て
山王七社の御罰を蒙る。今度の宿願空しくして、永く生死に隨ぬ。仍起證文
如件。元久元年十月日沙門源空敬白。十禪寺の御寶前に納め畢ぬ。
七ヶ條の起請文あり。二百余人の連判之ありて、山門漸くおだまりぬ。
余後南都興福寺の憤を止べ同二年九月に蜂起して訴書をさぐ。彼状
の如くに源空及び弟子權大納言公継卿と重科に所せられべき由訴へ申し
是に付て同十二月廿九日宣旨を下されて云く、頃年源空都鄙にあまねく念佛
を勧む道俗多く教化に趣く。然るに今彼門弟の中に邪執の徒名を専修

かるとひてひく破戒に顧ず。是偏に門弟の浅智より起りて却て源空が本懐に背く。偏執と禁過の制に守らずといへども刑罰と誘論の徒に加ふる事あれと云々。君臣の帰依浅からざりしかバ唯門徒の邪を制して。科を上人に懸られざりけり

斯て南都北嶺の訴詔次弟に止まず。専修念佛の興行無為にさゞる所に。次の年建永元年十二月後鳥羽院紀州熊野山に臨幸ありけるが。其頃源空上人の門徒住蓮房安樂房の徒。東山鹿が谷にして別時念時をとして六時禮讃を勤ける。聴聞の貴賤群をなし發心するもの數多ありし中に。御所の御留守に宮女出家の事ありける程に。熊野より還幸の後かしこきに讒し言も人やありけん。大に逆鱗ましくて。翌建永二年二月。両僧ともに罪科に所せられ。安樂房ハ六條河原住蓮房ハ。近江國馬淵に於て死罪に行る。住蓮ハ首より光を放ち落る頸高邑に念佛十余返を唱へ安樂ハ頸おちて後念珠をとる事百八。口より蓮華を生ぜられの奇持を見て斬られしを悲しみ念佛して遁世する者最多し

さるほどに日頃恨みを結ぶ。山門南都の大衆其折を得て再び敷訴におよび。山王の神輿春日の榊等を振奉らん強勢且ハ種々讒奏せしと有故に。月輪殿の御力にも及びがたく。終に源空上人土佐國へ流刑に定まり。其余僧徒八人諸國に配流せらる。其法に依て俗名をつけ。藤井元彦と改め俗衣を着せ参らせ。今年御年七十五去年の冬より御髪をめされねバ。白髪の[illegible]とかうなすひけるに打烏帽子を引入進せられ。水色の直垂を被せられ承元元年四月十二日（或ハ十六日）の巳の太鼓鳴りけれバ官人どもも御輿進られよと申すにぞ。頓て輿に打乗たまふ。其時月輪殿秋篠殿堀河殿。古京極殿。大宮殿已下坂東の武士受学相承の御弟子達三百余人御輿の前後に泣れつゝて声を立て泣かなしむ。午刻に御出あり。角張の成阿弥陀佛随蓮覺阿道佛などの力者の棟梁として。御弟子十二人公よりの御ともと惣じて六十三人御輿の前後につき進せらる。七條を西へ。大宮を下て。鳥羽をはして趣きけり法性寺より鳥羽まではり御輿を通し得ず知るも知らざるも。貴賤男女道の左右に

坂本の猿叡岳ヨ
登ツ〳〵伽藍を
乱妨セ
日吉山王権現ハ江州
志賀郡坂本ニあり
上の七社中の七社下の七社
合て廿一社人王廿九代
天智天皇の御宇ニ
始て鎮座あり桓武
天皇延暦十年
始て御輿を出
して祭礼を
行ふる釋行圓
ニ示現あるを以
後山王と稱し

猿を以て官者
〳〵と春日の鹿
八幡の鳩ヲひと〳〵
山王の群猿叡
山の伽藍を乱
妨〳〵佛像経巻
を破却うとと
ヲ〳〵ヲ念佛
停止の法令を山
王権現のつ〳〵セ
ウ〳〵霊験あらう
と聞き

充滿して袖と負あて袂と絞ぬるあり。哀なる事どもなり。鳥羽の南門より河船あり。これ御下向あり。尓後江口神崎の辺より海船に移りて南海の趣きなりき。

船中の間神崎の領城發心して入水し強盜出家とゝ成り同廿一日讃岐國那珂郡に著せり。又鬼神出現奇怪ありしかども事なれば略す

りり。高橋入道西忍の許へ入進しとゝ。上人とゝ別所へ宿させ進しせ湯屋結搆し。美膳調味しき。饗應斜ならず。此地は月輪殿の所領なりゆゑ。奉仕なり。

先達て御使と下され。懇ゆゑ。兼畧ケ仰せ附られ。且官人に仰せられ配所は土佐の國に定られしなり。他人の所領なれば覚束なし。讃岐國那珂郡は自領分なれば夫へ下し進せと有し程に。偖當國に著船せり。去程に官人は暇申して同四月廿八日に飯洛なり。斯て西忍は上人を置奉る在家あそこなへば恐れ多くて。當莊内の清福寺とて。真言宗の道場へ入まつりける。今年は寛元越年なり。翌寛元二年八月支度の道場に移りまし。尓後松山の莊長楽寺に趣き御逗留あり。又阿波讃岐の國境なる。萬歳山擲見の巖とて至りぬ。寛元三年

に土佐國室の津金剛智足權の岬と拜廻し三月の末に又清福寺へ皈りぬ。配流の間種々の利益あり略之

寛元四年七月二日に山王の猿坂本より二三十東塔に登る。中堂の四十八燈を打けし。巨大鼓を打破り坂本へ下る。次の日猿百四五十上りて惣持院の十二燈をうちけし。戸障子打破り又下る。次の日は猿二三百上りて文殊を引倒し。四天王を打轉ばし。たゞ〻房々に乱入して。經論聖教をうちて房舍を破却しられば。座主たる事に非ずと門跡へ相ふれ大鐘を撞て三塔會合し。衆議まちまちなり。式人云く我山はこれ王法を守る。奇特前代未聞の珍事なり。若佛法王法の危き。尤祈禱あるべきなり。と云々。東塔南谷藏人の註記をんで云く軌信和尚より以来十六代の程の先規傳へ侍べり。定めて山王の御咎あり。十禪師の御寶前にして護法の占と聞召さるべきなり。々衆徒尤と同じて明る七日十禪師にして。西塔北谷教受房の美濃の堅者の童に辰王とて。今年十三歳になると大床に上せ置て地藏の大咒を満く護法とと〻〻奉らんと欲し。更に給び各肝膽を碎き。五大明王の法と

こつく祈りるふ聊と驗ち。時ふ東塔北谷性智房法印の弟子ふ菊壽と九歳
ある小児あり。其日の衆會の體うんして。若き輩と俱ふ下まうが許多の僧の中より。
小鳥の如く飛出て。拜殿の大床ふ上り。辰巳とおのゐて其座ふ居直るるに時老僧
力と得て此をどの山上の猿の悪支凡ごろに覚えび侘ふ。さるして我神慮のおぼし
めし旨侘ふ早々ちり〜たまへて。伽陁と唱へられば。東西たちまち静まりぬと
時ふ児さめくと泣て二首の歌と詠ど

おのゐ為をふとあをどの山をれば。御名と唱る人と流をや
千早振玉のをどれと巻上げて弥陁の御法と聞しものをや

斯と云く我ハ是五百塵點久成の如来。和光の化義と海水ふやど〜。三千世界の能
化の主ハ相成道の光と鷲岳の麓ふ朗ふして。年久〜。我山の佛法と守護さる
ゆゑふ法宿権現と称る。自ら當山へ住る故ふ白山熊野の権現も當山ふおとし
ゆゑて俱ふ圓頓の教法と守護〜たまふ弥陁薬師一躰ふして。吾山と守ゐ〜

法のをんを御ゐげとうと山本ふ聖きく〜ど住じ〜ど思ふ
と打詠じ首とられて後向きて泣居る時ふ老僧を中籠と面々ふ落涙〜〜
是と限りど見えをう。扨ハ當山の訴詔ふ。源空左迁の御恨ふて侘ひるる急速
ふ奏聞と經く召歸さんば。尤神慮ふ叶ふべく侘や。やく納受と奇本のごく
我山と守護〜〜せて數通の陀羅尼と満られば。権現ハ上らせたまいける
同八月後夜の鐘ふ会議して源空左迁の御恨ふて侘ひるる。奏聞両度ふ及びる
折〜南都興福寺ふハ。春日山の鹿群り来て興福寺中の坊舎と角とうて破
脚ちて〜〜〜〜ば。衆徒等大ふ恐怖〜。則春日四所明神ふ神楽と奏〜奉て
神慮と伺ふ。巫女ふ託して宣く。我の是平等大悲如来濁世末代の導師
たれどと假ふ神と現〜。衆生ふ結縁と。ちうふ此項絶て濟度の般と失ひ
化益の掉と流〜ちう急ど尋れ求て元のごく〜飯せと高々と吽ば。衆徒驚き
さてハ源空と嗷訴して。流罪せらるる御怒ちるべ〜と一同ふ慚愧〜〜。

都ふ走登り流刑恩免の義と歎願を南都北嶺ともふ斯の願ひなれば原来朕が叡慮ふあらざる汝等が奏乱ふ依りて則ち勅免の論旨を下る。勅使ふハ和泉の判官阿部迫本八月二日京を立て同十八日讃岐國ふ著し源空上人の菴室ふ趣き勅宣の次第をくびふ人々ゟの御狀等を達せ上人ゟ御請を申させ給ふ勅使ハ同廿五日ふ上洛あり上人ハ九月廿五日ふ讃州を御立あらせ十月四日ふ兵庫ふ著あり同十日ふ勝尾寺へ御入あらせ百箇日御奉籠あり當寺ハ善中禪筭（勝尾寺の開基なり藤原致房の嫡子也）の古跡ふして勝如上人往生の地なり。此ゟ越年して翌年兼元五年國中の聖道僧俗等ゟ止ら言を加へ利益あらせ正月四日ゟ四帖の疏の御談義あらるれバ其年も暮年ふ及び上人當寺ふ一切經の所藏ゟ歎く思ひ虔空上人ゟ御相傳の一切經を取下し當寺ふ施入し奉り聖覚法印を唱導として御供料あり時ふ重ねて論旨を下さる。上人急速ふ勝尾寺を御出立

あり兼元を改元あらせ建暦元年と号ス。十一月廿日ふ御入洛あり御在所ハ大谷の御本房ふして前大僧正慈圓勅を奉り御房を修覆したまふ。上人ゟ今日を聞えれバ山嵩赤河原鳥羽の作り道まで参向ふ人々其數を知らず車馬を飛し思ひくの御迎ひなり。上人を見まらせて輿車ゟ轉落おろし十念を受まらせ御輿の轅ふ取つて歡びの涙を流さるる七條を東へ御通りあるふ貴賤武士道俗男女群集して大谷の御房まで更ふ透間ハなりなり。同廿三日故月輪殿（兼實公兼元元年四月九日薨去御年六十九或ハ五月五日御年八十七にて御往生）の北の政所。同大納言殿ゟ大谷ふ御参りあらせ故殿下上人配所へ御ゆくりの後日夜朝暮ふ悲歎し座しを共に其愁傷の積り御所労なり。終ふ御命終あらせと語りて今更なりふ歎かせ上人を公御存命にまさバ見参ふ入配所の物うらう言てんと坐ふ落涙しバ御弟子達も各墨染の袖を浸されける。去程ふ同十二月六日権中納言光親卿と奉行して御参内あるべきを仰出さる

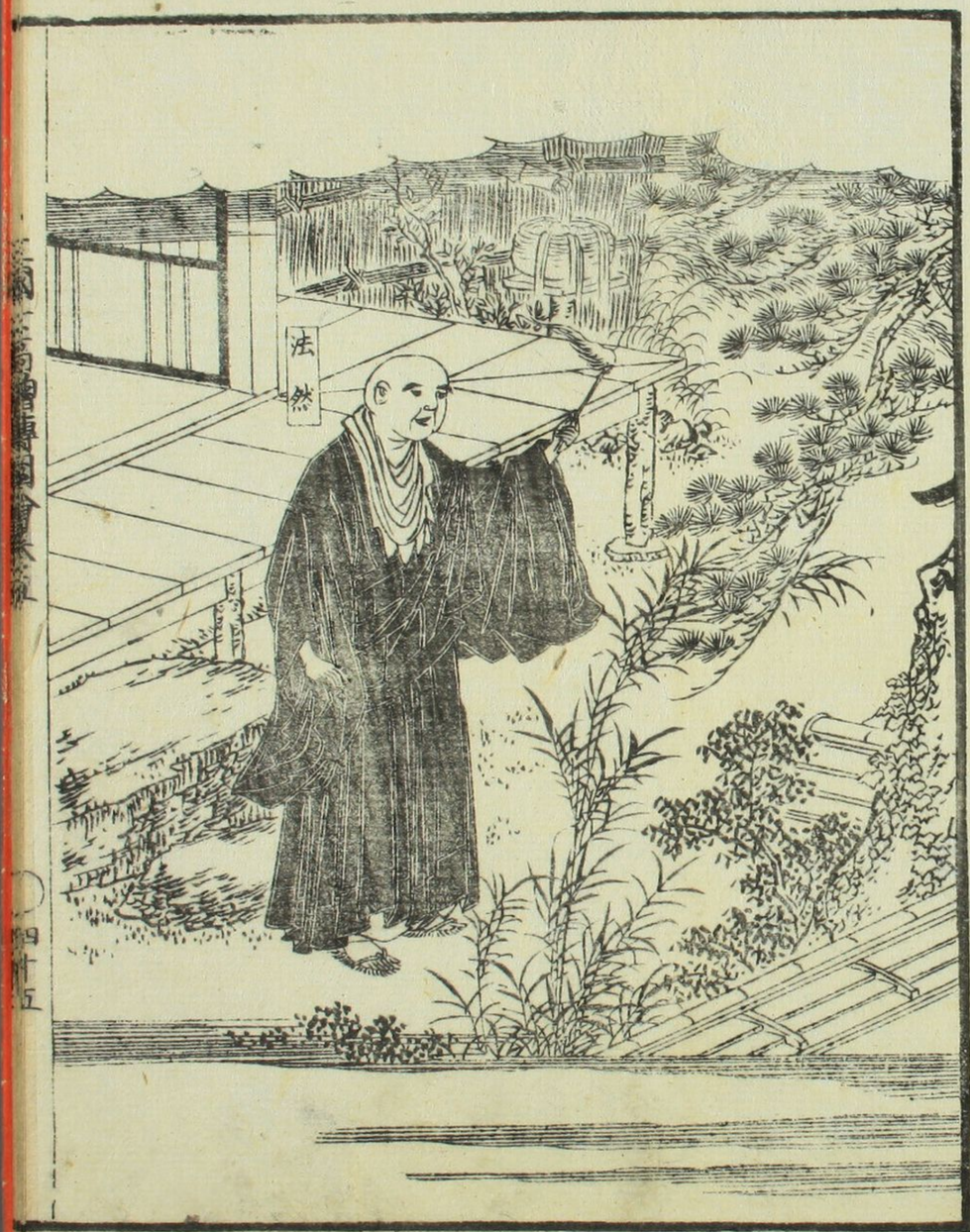
りんべ。次の七日ゝ御参内あり。今更御ゝ〻しく貴き御氣色なり。是ハ爰て神嵩ゝ
〻らて種々の御奇特あり〻と。両巻使被露あり〻る事殿まで〻の聞え有り
ようてなり。上人御参内の後ハ御飯浴らひ。歳末の御こゝろひしひし。上下万民時々尅
〻ゝ市とゝ。御弟子達ハ面々ゝ縁ゝ〻ふそゝひて他行せゝふ就中勢観房と云ハ
長病者配所の御供申さん。迫日ゝ快氣せゝふまゝ。勝尾寺まで御迎ひ
参〻ゝ。殊更何事も勢観と仰せあるる（勢観房の由縁真ゝ妻）かゝて御弟子達ゝ〻く
諸方ゝ参り集ゝて。大谷ゝ越年せゝる。明年建暦二年正月元旦。法蓮
房道場莊嚴〻て。年始の御念佛。勤行あゝ〻と言上りるされゝと上人御入堂
もまゝまさん善恵房参〻。御念佛の時越〻ゝる〻ゝ候〻と申せハ。源空ハ風氣
の心地ゝ〻各勤〻と仰る。仰ゝ〻ふ朝の念佛勤行〻ゝ〻ん。法蓮房参〻て
見たてまゝれべ。〻〻ゝ御寢〻ゝ給ゝ〻ん。御心地と問参〻れハ心持例〻〻ん
今日ゝ〻七日別時有〻と仰あり。起居〻〻ゝ〻ん。〻ゝ後ハ高聲念佛

五躰と責て三日三夜〻〻備各ゝ對て宣〻〻源空〻命ゝ〻〻一月二月も
延べ〻ん。頓て御眼を塞ぐ念佛と止〻て三日〻〻。善恵房参〻て上人と
伺ひたてまゝり御臨終佛の阿弥陀の像と拜まゝ〻〻と言セバ上人御ゝ〻と
空〻〻ひて彼佛の外ゝ佛のおゝ〻ゝ〻ゝ観音勢至ハ看病人の如く源空ゝ
傍と去たまゝ〻〻。汝ら〻拜ひやと仰〻〻〻不思議〻〻。備老僧達一人
ゝ〻ゝふ念佛〻べ〻と仰〻れべ面々御前と〻〻べ守〻〻る。斯〻〻程ゝ上人
御往生の撿見〻〻。權中納言光親。左大辨國實両勅使ゝて大谷ゝ〻〻〻ひ
御逗留あり。廿日の未の刻〻御房の上ゝ紫雲〻れ覆ひ。廿四日の酉の刻〻
御念佛〻〻〻〻しゝ。暫〻〻て睡眠〻〻ふ。〻〻〻〻夜〻〻あけ〻〻廿五日の巳の
尅ゝ〻〻しゝ。上人御目〻〻〻〻四方と御覽あり〻て。あれ障子〻れと仰〻〻〻
〻〻〻〻客殿の間の障子〻〻る。ゝ〻ゝ両勅使と始〻て宇都宮。成田。大胡。別府佐々
木の人々列座〻〻。上人御念佛〻〻〻〻。如何〻〻年久〻〻仰せられべ御飯浴

の後御目ふかくは候へあのざ取あつべ上洛けまつり候を言と上人遥々れ
上洛神妙なりと仰せる惜聖観房とらして。汝ふあづけ〳〵葛籠こうぐをと
蓋をもて。中なるものと取ぐをと仰せらる。消息二通切紙の札包こうるれ
二色出さをて。上人仰らるは勅使とぐらたてまつりて坂東の人々も聞たまた
人の難義の益途ふは。源空がごとれとたのもしく事あり。其ゆえは本三位
中将重衡卿。越前三位通盛卿。平生来て源空ふ對面ありて洛中退出の
後と重衡卿は。源空ふ受持法号と持て知識とをたまひた。殊ふ通盛
卿は〳〵賴と二世の契とを〳〵なまひて言ふは。我一門運盡て都と落行
ぞれとも候らへば。合戦のごとは一陣と守るぐ候ふ間。都のをりふて通盛討
れらと聞召とは。御弟子等と遣されて。攻殿とをりて後世とをとひまら
べし。攻殿ふもらし有べしと約束あるし程ふ子細有べしと領掌せり。案ふ
違ぐは一の谷の城廓やぶれ平家の一門多く亡ぐとたとえしぐ。隨蓮成阿と生田

の森はりて。若干の死骸と見るふ毛〳〵〳〵。渓川ふ下て見るふ切紙と以て
越前の三位通盛と書て脇の下ふ押〳〵是と取て勝尾寺へ来まる。源空参籠
の志ありて。折〳〵ふ有〳〵程ふ火葬〳〵骨と取て上洛とる道ふて
壁野の宿ふて風聞ふきけば。小宰相の局ふは。鳴門の沖ふて身と投らるとぐ哀さ
いぐぐとあるぐ是ふて通盛二人の菩提と吊ふとをるふ。二月廿日夜ふ入て。女姓
の声して源空ふ見参とぐ〳〵言入るる。誰ぐ〳〵尋ぐバ志のひて物もいてべ。
若通盛の方の人と問つバ志るると答ふ。備寄ふ入まく事のるとなづめれバ
通盛自然の支あるべ。上人とる移て賴置参らせれバ。都ふのぐて後。もかくと
有べしと宣ひし詞とたのもふ福原ふる人目とつゝ是まで参てるるを語ても
敢ぐ法居たる源空哀れさがぐるぬく。惜閑る所と志ひて育ゝ置る。程く
平産と生る所の子は男子なる取上育る所ふ産の後六年三日とる文ふ小宰相
ど此は二三日煩ひて不圖と黄泉ふ赴ひぬる斯〳〵程ふ二人の菩提と吊

小宰相の局
晴れ工人の
菴室と訪ふ



なり各その時の子と源空なりと申されしかや。斯る濡衣を著て糠肩なりし
子こそ彼勢観法師なりと仰せられ。都より参らせられし文。又ハ明日討まゐらん
とての今日生田の森より進じられし文死骸に附られし札二親の骨の器の蓋
に銘を書附たるを勢観に給ひ。勢観これをみられて。胸にあてゝ泣しくしく
愁歎ありけるなん悲しき哉有為の里。父ときゝハ名のミ残りて白骨なり。母と
見まいハ其級をわかれし哀なる哉南浮の界。白骨ハ止まれども其貌のなし分段生
死のをわれバ父子の恩愛を隔らんとて唯今の吏のすかたにおけるなまへバ見聞の
人々袂を絞り。哀傷の涙押かへくぞ見えたる
さるほどに己の太鼓を打ければ紫雲ハ御房の上に垂覆ひ。金色の光明ハ日に映
して輝き。異香ハ御房の中に薫じて時に上人仰られ。師となり弟子と成ハ
多生の契り恩のかゝり徳のゆかれ宿生のかなしひなり生夢の中の對面ハ今に限
まり。生死の恩愛ハさもや極めぬ報土無上の再會を期すべしと宣ふ法蓮袈

裟参らせよと召さる。慈覚大師より御相傳の九條の袈裟を進らせらる御手づ
から引かけ給ひ高聲に光明遍照十方世界念佛衆生摂取不捨と唱へ北枕西向
にふかして念佛九遍にして今一返ハ南无の御聲の下にて御息絶させ給ひ
たり今後御唇の動きたまひて十余返なりし善恵房涙とのべ申けるは。
上人の御化導の輩にを十念と授けおはしける。佛の本願にを乃至十念と
説善導を十聲と釋しおへり上人御存日にハ源空が往生ハ末代の念佛者の
手本なるべしと仰候ひし今一返候とぞこそ御不足ハ候わねども今一遍御念
佛あるべく御弟子等に聞せまへとて法蓮房南无阿弥陀佛くととなえ
奉られれハ遥に紫雲の上に南无阿弥陀佛と一遍となへたまひぞ奇特なりし
往生なり建暦二年壬申正月廿五日午の正中春秋八十歳の往生なり。されバ
受学相承の御弟子或ハ他宗皈伏の御弟子。信心堅固の念佛の弟子ハ結
縁聞法の類ひにいたるまで。悲みの涙胸を焦し。所謂佛圓寂に入たまふ時ハ

空を飛鳥と翼とられて御棺の前に落地とこゝる獸と。膝を屈して涙を流を吹風枝を嘆ぶく草木色を變じ。江河とゝまれと止りて登地の菩薩も無生の觀智を失ひ。證果の羅漢も漏盡の袂を絞をたゝひ无手解脫の御弟子を無常轉變の好こゝ悲しみも所理なり況や末世の愚侶なり於とや生死出離の善知識ふとゝれ奉て。別離のうゝ禁しゞ

既ふ暮時ふ[illegible]ひゝれバ偖有へきふあゝねハ上人を入棺し奉て一同ふ念佛數百返とゝ。廻向を終て後。御葬の儀式評議せゝる。則ち釋尊の御荼毘の如く成へしと定めゝる此由法蓮房ふ申ゝれハ法蓮ゝゝ言ゝるハ。

十二歲上人廿四歲の御とゝ[illegible]ゝ恭ゝゝ師弟の契とゝ奉てゝゝ已来朝夕信空しゝゝれ極熟の空ふハ扇とゝゝ御前ふ候し。極寒の冬の夜ハ衾を重ねて御前ふ參る經論とゝゝけてハ鶏鵡の囀とゝゝ。疏とゝゝてハ伽陵頻の御声と学ふ斯の如きの御ゝゝ一年二年の好ゝゝ。五十余年の年序ゝ。ゝの御名残ふいとゝ无念ふ火葬し奉て忽ふ白骨と成奉ゝん。あゝゝく敢ゝ覺候ふと歎ゝと面々法蓮房の御義ふ同ひて土葬の義式ふ定ゝゝ明れハ廿六日御葬所ハ大谷の上の山。青石のある所と定ゝれ石を拾ひ土を築きゝふ僧正慈圓これを見給ひ。青蓮華の生ゝし石ゝゝて奇特の思ひとゝゝふさゝ程ふ丹穰の撿見の勅使ゝゝ。御往生の容子を奏聞を未曾有の御往生ゝゝて。御弟子の中へ論旨とゝ下さゝ土御門院ゝゝ上人御往生の葬の御絹。水引以下の為ふ唐綾十匹。白布三十端。近衛の藏人等とゝて送ゝゝ同廿七日の午剋の御葬ゝゝ御棺ハ御枕のゝハ法蓮房。御後とゝ善惠房惣じて配所の御供十二人の僧侶。御棺の左右ふ附ゝ其外の御弟子達結縁の老若勝て計へべゝ。同音ふ念佛して御葬時ゝゝ埋奉て畢ぬ上人羨て仰られゝハ我往生釋尊の如ゝと仰出されゝられバ。御房子ふ言ゝゝ端座合掌して候ふまゝと申ゝれバ些ゝ笑ゝ。ゝひて彼婆婆

宿りたまふて浄土の往路を知らしめたまふなり。源空端座合掌せば人々定め
て是をまもり若失念のことあらんおりハ己が心を扱ひて名号を本と
まうすべし。織身端座によりくべし唯念佛往生をなすべし。釋尊御入滅の
儀いかでかそむくべきやと。頭北面西右脇に臥しあひ御往生を遂させたまひ
おはんぬ。扨中陰の間ハ各退散なくして精誠をいたし報恩を謝したまふなり
實有がたかりし事どもなりし

一書云上人の住房の東の岸の上に西晴たる勝地あり。或人これを相はからひて
自身の墓所にせんと定め置たるを上人都に皈らせ給ふの後去十二月かの持
主上人に寄進し。券契帖にあまたく寄進状に相そへて奉りければ。源空に
譲りあたへらるは是三寶に同向せらるゝ也。佛請うくとて火中に投入られぬ然
に今上人往生したまひて此地に廟堂をたてて石の唐櫃をかまへて納奉ると云
歩みを運ぶりの忌月としりくて貴賤市をなし。忌日をまちて上下袖をつらね

けり当時知恩院といへる是なりとぞ

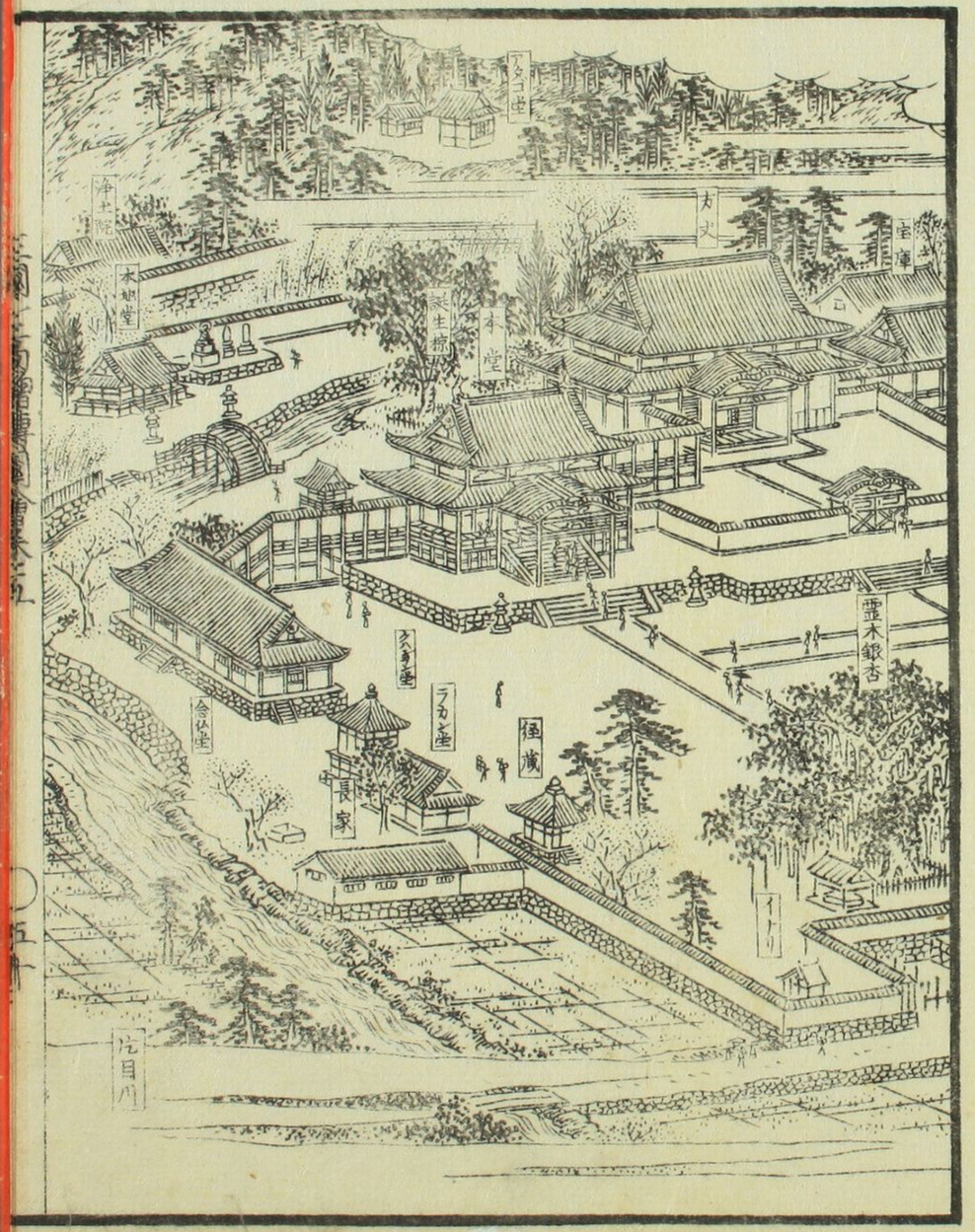
源空上人滅後十五年に相あたる嘉禄二年丙戌の春。一の不思議出来せり
その故ハ上野國より叡山に登りし習学者に。波書の堅者定照といへる僧有
深く上人の念佛弘通をそねみ選擇集を破する文を作りて弾選擇となづけ
源空の弟子習学者多しといへども。本ハ天台宗の学者。今ハ師匠のおしへ
を学ぶ。一宗を與行して一流の徧をなる者なりとて。隆寛律師の許へ送り
ける。律師これを見たまひて先師の素意を顕さんがために顕近尺といふ
文を作りて定照が難波をとゞろかして其肝文にいはく汝が僻破ハ。的らざる
ことたとへバ暗天の飛礫のごとしと嘲りて書たり。定照いよいよ憤りて同年の夏
衆徒相かたらひ天下に一向に浄土門におもむきた顕密の教法既に癈ん
とするに依て念佛を停癈すべし。就中隆寛ハこれ我山の学者として圓宗
の教法をすてて。念佛専修をするとまふすべからず。張本を遠流すべし先

その根本源空ゲ大谷の墳墓と破却して。彼遺骸と加茂川白川ふ蹴ひらそ
強々の群義ふ[illegible]。若子西どし俱々ふ同じて一心神水を服し。當山ノ
門ゑう奏聞をべさう〜治定して貫主ふ申ハ其時関白ハ家實猪熊殿
山門の座主浄土寺の僧正圓基ハ攝政殿の御兄ゑう内外ゑも強縁ふく
衆徒濫訴ふ勅許あるしハ。六月廿三日所司専當ホと數百人ばかり。ゑふ
京都の守護職六波羅の北條修理亮平時氏使者ゑて。東大隅入道親子
五人。内藤五郎兵衛尉盛政父子十五騎ふそまかり向ふ。洛中邉土耳目を驚かし。
人々驚きあへう使者云左右ゑ〜狼籍といふんと甚以所謂ゑ〜。緩令子
細あるべし天聽を驚ゑ〜なをまゑう。別して將軍家と措くの條奇怪ゑ。
亦勅許あるべし武家方義〜其沙汰を經べ〜と。面々問答ふ[illegible]ゑも是非
ゑ〜凶徒等廟堂を破て房舍を毀ちられば止と得ど定ゑ〜山門乃
者どし聞ゑう〜ん。善悪不二邪正一如の所理。関東の徒ゑ前の家と嗣。西方

の行者魔障退治の為ゑうと各馬の鼻を列べ法ふまゑをと下知して。散々ふ
武威を震ひられば蛛の子とち〜ふ如く逃ゑう。斯く其日も暮ふ及びゑる。
尤堂舍破損をとゞめし。悪徒〜ゑく退散〜られば墳墓ハ[illegible]手をうけ
られば其夜ハ信空證空妙香院僧正良快月輪殿御子息おのく御弟子二百余人
良ゑく涙どしふ警固して詮合あるへ。今度まづ退散をべし。山門の
憤て終ふ止べ〜し。ゑられハ今夜の中ふ改葬〜奉らんふ如どと評議決〜られば
夜更人静ゑて後墳墓と切き奉る。御棺朽損ぜハ蓋をもて。拝奉とハ
聊の損壊ゑく御色少〜黒〜ゑ〜まゑどし。御袈裟衣と朽ど異香
遠く薫じて馥郁ゑう。御弟子ゑう奇特のゑ〜ふ敬禮〜く
云く歸命稽首法然上人。生々世々値遇頂戴とゑく。阿弥陀經同
音念佛數万返〜て。終夜落涙千万ゑう。ひう〜月氏ふハ教主釋尊の尊
容と盗〜奉らんとゑる時。警固と云。今日城ふ本師上人の遺骸とめゑを

美作國久米郡稲岡庄
栃社山　誕生寺之圖

當寺ハ円光大師御誕生
の古蹟なり廿五霊場の
第一番とし源空四十三
歳洛東大谷ゟ在
て自ら三尺の影像
と作りふ熊谷入道
蓮生持下り當
寺ゟ安置ふ
寺領五十石



奉らん災難なりとて非ずして、宇都宮弥三郎入道蓮生房鹽屋入道信生房千葉六郎太夫法阿房、渋谷七郎入道、道遍房、頼宮兵衛入道、西佛房の輩いづれも甲冑を著し、兵具を帯し、軍兵を卒し、参向し、御棺を守護し嵯峨二尊院へ渡し奉る。然るに尚山門より捜し求るし、風聞ありしかば。同廿八日の夜忍びて大秦廣隆寺の来迎房圓信或は圓空の許に置奉り、在所と口外をばせずと各佛前に誓ひて退散し畢ぬ

嘉禄二年十二月廿八日改元ありて安貞元年と云ふ同二年正月廿五日の暁天上人の御遺骸を廣隆寺より西山栗生野幸阿弥陀佛房今光明寺と号す許に渡し、遺弟一所に来會して荼毗し奉る。紫雲空に満て香花も甚し。御遺骨をもひ寶瓶に納め奉らん為に、二尊院の西の岸なる余後正信房の沙汰として彼芳骨を納め奉らん為に、二尊院の西の岸の上に塔を建て。貞永二年正月廿五日に正信房御骨をもて栗生野に至る

に幸阿弥陀佛の御骨を菴室の土藏に深く藏して鎮西に下てまうす。鍵を尋ねる土藏を開くに堅く誡めとして鑰を預け置ざるを留主の僧こゝろうかりて。大に驚き相伴門弟二十八人面々に力を盈て推して戸を開んとすれども叶はず。空しく帰りぬ。此時御在世なりせば湛空が帰しなん申入んに。見参に入で空しく帰りぬと泣々口説きけれども土藏樞鳴て覚えねば。門弟の中に信覚と云僧に戸を引き見せ。正信房の指圖にて力を用ふ。何の変なく明かなる歎申を無きと。聞き入られるにて。歓びの涙と流し。御骨を出して塔の中に納め奉りぬ。抑元祖源空上人一代の化導諸傳に載せ其德義勝て計へがたし。今略して云ふ一二を挙る。原に阿弥陀如来の智恵と手にとる大勢至菩薩の化身なるが故なり。御臨終迫くなりぬれば御弟子達に對し。我は是安養久住の人いなは

彼土ふ還飯と言ふ。尤天竺釋尊の在世ふハ。頭陀第一の摩訶迦葉尊
者と現ぜたまひ釋尊の化導を助けたひ。唐土ふおひてハ善導大師とあられ
のひく。諸師の謬りを改めたひ。古今を揩定して念佛を弘通し。今又栗散
片州の此日本ふく源空上人と現じたまふ。さる程ふ八家九宗の其中ふて。
大原勝林院五禪寺ふて。六宗の達者と問答往復あって。終ふ聖道諸宗
の外ふ。淨土一門を創建したひ。一天四海ふ比類なき淨土の真門。他力往生の
一路を開きたひ。然ども其流を汲。其法水を呑んこの誰か此大恩を頂き
奉らざらん。深く教導の高恩をおもひ其恩を報ぜんふハ信為能入の金言を
守て。一向專念の指南を仰ぎて。行住座卧ふ称名念佛して。元祖の御跡を
ふたひ真實の報土の往生を遂たてまつらハ是を誠ふ報恩の最上なるべし
ゆゆく緩ぐ。ふ。ふ。ふ。元禄十年勅贈あって。圓光大師ふと号ける。
介後寳永八年 東漸の二字を加へ。尚年を重ねて。追號あって 圓光
東漸惠定弘覺大師と称し奉る仰ぐべし尊ぶべし

三國七高僧傳本朝之巻末大尾

明治十二年
卯一月新調

長岡殿町
柳本角衛